

### 第三章 古墳文化と那珂国造

三世紀の後半から六世紀までの二百余年は、農耕の発達と金属器の使用により、次第に財力と武力を貯えた部落が、より高い国家に発展する時代であった。魏志の倭（わ）記人伝にされた女王卑弥呼（ひみこ）の耶馬台国（北九州説・大和説などがある）は姿を消し、大陸では、諸国の朝貢をうけて中国に勢力を誇った魏もすでに滅び、晋や南北朝の対立する時代を迎えていた。また朝鮮半島でも、後漢のころ南朝鮮にあった馬韓・辰韓・弁韓の諸国は、新しく興った百濟・新羅・高句麗によって、相次いで滅ぼされていった。

四世紀の頃になると、大和地方には皇室を中心とした大和朝廷が興り、富と武力を背景に、畿内から北九州にいたる西日本を統一し、さらに朝鮮半島に進出して、百濟や新羅を抑えて支配下に入れ、植民地任那を経営するまでになった。

しかし朝鮮半島における多年にわたる戦いは、莫大な戦費と人力とを消耗し、また高句麗の強力な反撃を受けたので、わが国はついに朝鮮半島から撤退しなければならなかった。そのため、大和朝廷は国内の充実を図るためにも、任那の回復を図るためにも、東国や九州南部の統一に力をそそいだ。

古事記・日本書紀には神武天皇の東征、崇神天皇の四道将軍の派遣をはじめ、景行天皇条の日本武尊の熊襲や蝦夷の征伐、仲哀天皇条の神功皇后の三韓征伐、「常陸国風土記」に見える倭武天皇（日本武尊）の説話など、その中には史実としては疑わしいものもあるが、いずれも大和朝廷の発展ぶりを伝えている。

大和朝廷の発展は、地方に関する限り、「古事記」や「日本書紀」などによって明らかにすることは不可能に近い。しかし、大和朝廷の支

配者は、土を盛った巨大な墓を残したし、また大和朝廷の影響を受けた地方の豪族たちも、それぞれの地域に土盛りの墓を作ったのである。このような土盛りの墓を古墳といい、古墳の作られた大和朝廷の時代を古墳時代ともいうのである。

各地に現存している古墳（第一図）は、大和朝廷の勢力を反映したものであり、とくに前方後円墳（瓢箪形をした塚）は有力者の墓であるから、その分布をたどれば、その勢力の伸展をほぼ推定することができる。

大和朝廷の発展は、三世紀の後半頃から、七世紀まで最も顕著であったから、古墳もそれに応じて変化したと考えられる。

そこで、考古学では古墳時代を前期・中期・後期に分け、前期は三世紀の後半から四世紀の半ば頃、中期は四世紀の後半から五世紀の終わり頃まで、後期を五世紀の終わりから六世紀の終末までと区分して、この時期の文化を知る手がかりとしているのである。

しかし、この時代は階級分化が著しく進んだ時代であるから、かりに古墳を発掘して、その副葬品により、その時代の文化を知ることができても、それはあくまでも豪族の生活内容にかぎられ、一般庶民の生活を知ることにはならないのである。

庶民の生活は、大和朝廷の時代に入った後も、依然として竪穴式住居に住む者が多く、その生活内容も、豪族と比べて余りにもかけ離れた、貧しいものであった。



第一図 水戸付近古墳分布図

また大和朝廷の諸地方統一は、同一時期にいっせいに行なわれたものではなかったから、その政治的・文化的影響の時期にも遅速があったことを認めなければならない。

さらに、征服された場合と、帰順した場合との相違、あるいは勢力の大小、親近の度合なども当然考慮に入れる必要がある。すなわち地方的な偏差の事実には注意しなければならない。

## 第一節 愛宕山古墳と那珂国造

### 水戸地方の部落的小国家の消滅

弥生式時代の後期（三世紀）になって、水戸地方では十王台式遺跡の示すように、農耕文化が急速に展開した。農耕には多数の労働力が必要であったから、単独の生活は許されず、たえず家長を中心とする家族の団結を余儀なくされた。しかも土地の肥沃、耕作力の多少、あるいは勤怠の如何によって、それらの集団の中には自然と権力の消長や貧富の差が生じ、強力な集団は他の集団を支配して、より強い統一体へと発展していったと思われる。いままで藤井町・飯富町・（文京一、二丁目）愛宕町・田谷町・柳河町・谷田町・元吉田町・酒門町などにあつた小さな集団は、大和朝廷が地方へ統合を開始した四世紀の後半までには、より大きな集団に結合されて、部落的な小国家を形成するにいたつたものであろう。こうして那珂川流域にできた国では、魏志倭人伝に記された耶馬台国のように、すでに神を祭る首長をもち、首長を中心とする氏人や、隷属民をもつ氏の集団のような組織があつたと考えられる。しかしいままでの調査では、那珂川流域を含めた常陸地方には、五世紀以前の古墳は発見されていないところを見ると、二世紀後半から四世紀にかけては、水戸地方はまだ大和朝廷の支配下に入つたとは考えられない。

宋（五世紀ごろの中国の王朝）に朝貢した大和朝廷の国王武（第二十一代の雄略天皇といわれる）が、順帝（南宋の皇帝）に送つた上表文（四七八年の宋書）の一節に、「東は毛人（蝦夷）を征すること五十五国」とあつて、この毛人は関東地方の蝦夷を示していると考えられる。したがって、五世紀の後半までには、常陸国も完全に大和朝廷の支配下に入つたであろう。「また常陸国風土記」（元明天皇の和銅六年に、諸

国に命じて作らせた地誌で、風俗・産物・伝説・地名の由来などが書かれている)に、建借間命(那珂国造の初祖といわれる)や日本武尊の征討の記事が随所に見られるが、この記事も五、六世紀の常陸地方における大和朝廷への服属を物語ったものであろう。五世紀前半につくられたと考えられる、行方郡玉造町沖洲の三昧(さんまい)塚古墳、新治郡八郷町柿岡にある丸山古墳・佐自塚、東茨城郡大洗町鏡塚古墳、水戸市愛宕町姫塚古墳(現在は無い)・飯富町安土星御立山古墳などと、常陸国風土記に示された記事を考え合わせてみると、鹿島地方に上陸した大和朝廷の軍隊が、潮来町付近の豪族夜尺斯(やさかし)や夜筑斯(やつくし)の強硬な抵抗を退(しりぞ)けた後、行方から筑波へ征討軍を進めると共に、他方では行方から那珂川河口に進出し、同時に那珂川をさかのぼって水戸地方に入ったことを推定できる。

このようにして水戸地方に進出した大和朝廷の勢力は、愛宕町(文京一、二丁目)から渡里町付近を中心に、それまでこの地方に存在した部落的国家に代わってその勢力を拡大し、仲(那珂)国造の成立をみるにいたるのである。

古墳が営まれはじめた水戸地方の様相は、どのようなものであったろうか。次に古墳に葬られた豪族や庶民の生活を再現してみよう。

## 古墳にみる豪族の面影

さきにも述べたように、大和朝廷の支配下に入ると共に、三世紀頃にはなかった土盛りの墓が、愛宕町や飯富町安土星に作られるようになった。愛宕町にある姫塚古墳や、安土星の御立山古墳がそれである。

姫塚古墳(第四図参照)は建借間命の夫人の墓であろうといわれる前方後円墳で、全長五八メートル、前方部の巾約二〇メートル、高さ三・五メートル、後円部径四〇メートル、高さ四メートルの比較的前方

部の低い古墳であるが、一〇年程前に盗掘され、後円部の中央に直径一メートル、深さ八〇センチ位の大きな穴があいている。この付近には穴から掘り出された粘土が散乱しているほか、穴の内部から石で作った直径三センチ、厚さ三ミリ位の鏡（中央に孔があり、有孔円板とか、石製模造鏡といわれる）と、鉄刀の一部が発見された（1）。

以上のことから、この古墳は、死体を埋める時に木棺の周囲を粘土で覆い、（粘土槨という）その内部に墓前祭に用いた模造の鏡を埋めていることや、死体に添えて鉄製の大刀があったことが推定される。この姫塚古墳が五世紀前半の古墳であることは、昭和二十四年に発掘された東茨城郡大洗町磯浜の鏡塚古墳（2）や、行方郡玉造町沖洲三昧（さんまい）塚（3）、新治郡八郷町柿岡丸山古墳（4）、佐自塚古墳などによって推定できる。

鏡塚古墳は大洗町磯浜の台地にある全長一〇五メートル余の、埴輪円筒（土管状の埴輪）をめぐらした前方後円墳で、後円部には埴輪家をおき、その地表下には全長十数メートル（残存部で一メートル）巾三・五メートルの粘土槨（ねんどかく）があった。この粘土槨の内部は長さ八メートル、巾一メートルの広さを持ち、日本製の鏡二面と、釧（くしろ）（腕輪）刀子（どうす）（小刀）・鉏（やりがんな）・白玉・丸玉等の石製模造品（祭りのために実物に似せて石で作った模造品）や、ヒスイの勾玉、竹製の櫛など千数百点の遺物が出土している。

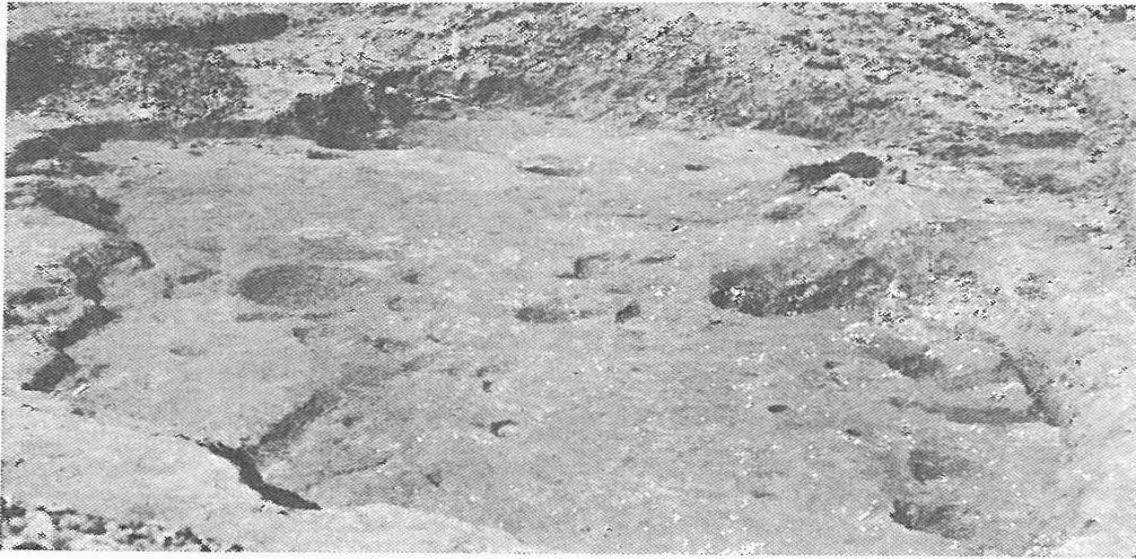
昭和三十八年発掘した佐自塚の粘土槨からは（5）、祭祀に用いたらしい五領式土器（古墳時代前期の土器）と、ヒスイの勾玉のほか、丸玉や小玉が発見されており、前方部からは壺形の埴輪も出土している。また丸山古墳では銅製の鏃が発見され、沖洲の三昧塚からは馬をかたどった金銅製の冠や、戟（げき）という鳶（とび）口形の武器も出土している。飯富町安土星の御立山古墳も、外形からみてそれらと同時期

のものと考えられる。一般にこの時代の豪族の墳墓は、前方後円墳が多く、百メートルから五、六〇メートルの大きさを持ち、台地の縁に作られている。副葬された遺物をみると、墓前祭の時に榊の木につるしたと考えられる石製模造品や、死者に供えた土器のほか、鏡のように死霊に対する呪術的意味をもつものが目立つことは、当時の豪族の性格をよく示しているようである。

当時の豪族がどのような家に住んでいたかは、庶民のばあいほど明らかではない。鏡塚古墳の墳頂におかれた埴輪の家は、死者のために建てられたものではあるが、豪族の家を知る手がかりにはなろう。弥生式時代に低湿地へ移動した頃から、高床式の平地住居があったし、埴輪家がほとんど高床式住居であるところを見ると、豪族や上層階級の者は、すでに高床式の平地住居に住んでいたのであろう。

大陸から輸入された種々の日用品も、大和国家から派遣された人々や帰化人を通じて、豪族たちの手に渡りはじめたらしい。しかしそれらの品物は高価であり、その数量もごくわずかであったから、一般の人々が求めることはなかなか困難であった。西日本や大和地方では、食器なども従来の素焼きの土器に代わって、釉（うわ）薬をかけた須恵（すえ）器（陶器）が用いられていた。



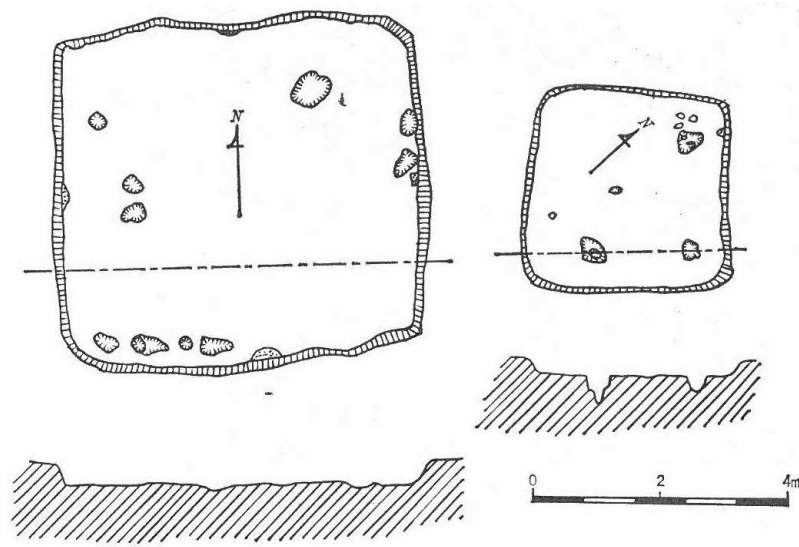


第2図 長岡住居址全景 —茨城町—

この須恵器などは水戸地方でまだ用いられなかったのであるが、古墳からはヒスイの勾玉・碧玉製の管玉・ガラス製の丸玉・小玉などが発見される。当時、地方の上層階級の人々は、これらの品物に糸を通し、ネックレスやイヤリングとして首や耳にさげ、得意になっていた。そこに古代豪族たちの生活の一端がうかがわれよう。

いっぽう、庶民の生活はどうであったろうか。水戸地方に水稲耕作が広がった三世紀の後半頃は、貧富の差や階級の分化が生じてきたとはいっても、それはまだ著しいものではなかった。しかし部落的小国家ができ、さらに大和国家の支配下に入るにつれて、庶民の生活には新しい変化が起こってきた。たとえば、ある時は戦いのためにかり出され、豪族が死んだといっってはその墓作りに汗を流さねばならなかったことであろう。彼らの住居をみても、食器をみても、依然として弥生式時代以来の生活から一步も抜け出していない。進歩したといえ、米を蒸す甑（こしき）が出現した位であった。

柳河町の下宿や、勝田市堀口・東茨城郡茨城町長岡にはこの時期に住んだ人々の住居址が発見されている。



第3図 長岡住居址実測図 -茨城町-

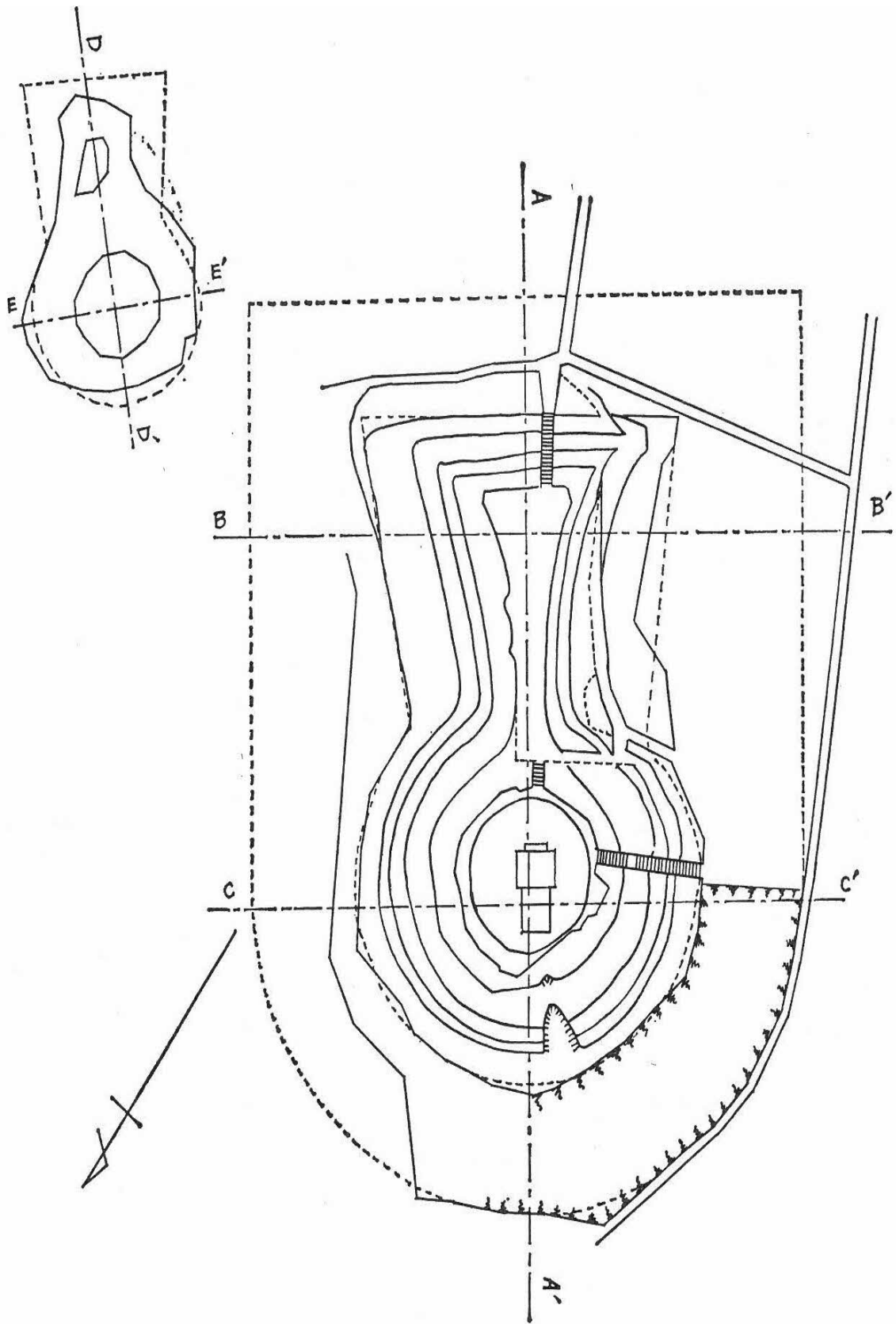
長岡の例をみよう。この長岡遺跡には二十数個の集落が発見されている(6)。(第三図)一辺五メートル位の隅の丸い方形の住居が、ローム層(赤土)に掘り込んで作られていることは、縄文式時代や弥生式時代と、まったく変わっていないし、炉を床面に設けていることも同じである。違ったといえば、柱穴がはっきりしないことと、柱穴が浅く、不規則であることである。あるいは住居の壁の外側に垂木を直(ぢか)に埋めて、支えとしたのかも知れないが、これを確認できるような穴も発見されていない。土器類は、第一号址では壁ぎわに棚を作って、並べていたらしい。この土器は和泉式土器という素焼きの土器で、弥生式時代の前野町式土器に近い土器であるが、文様はわずかに篋描きの痕が残るだけで、ほとんど無文様のものが多い。ただ用途によって高坏(つき)・深鉢・甕(かめ)・埴(つぼ)・甗(こしき)などがあり、大きさは口径二〇センチ、高さ三〇センチ以下の中型のものが利用されている。甗の出土は米を蒸して食べたことを示すものであり、高坏は台を付けた皿で、好んで用いられたらしく、どの住居からも発見されている。

第一号址や第四号址から出た土器には、和泉式土器より古い五領式土器と思われる土器がある。この土器については、水戸地方では明らかでないが、弥生式時代から古墳時代にかけて、長岡には引続き住居が作られ、人々が住んでいたことになろう。土器の上からみれば、庶民の生活は進歩したといっても、やはり低い生活であることに変わりなかった。

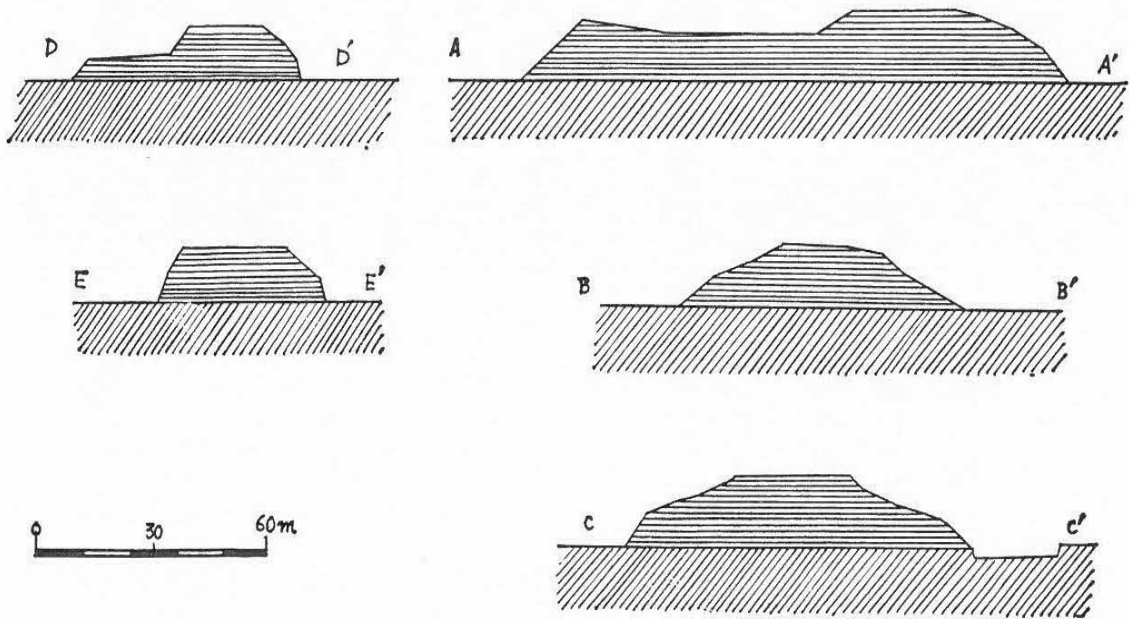
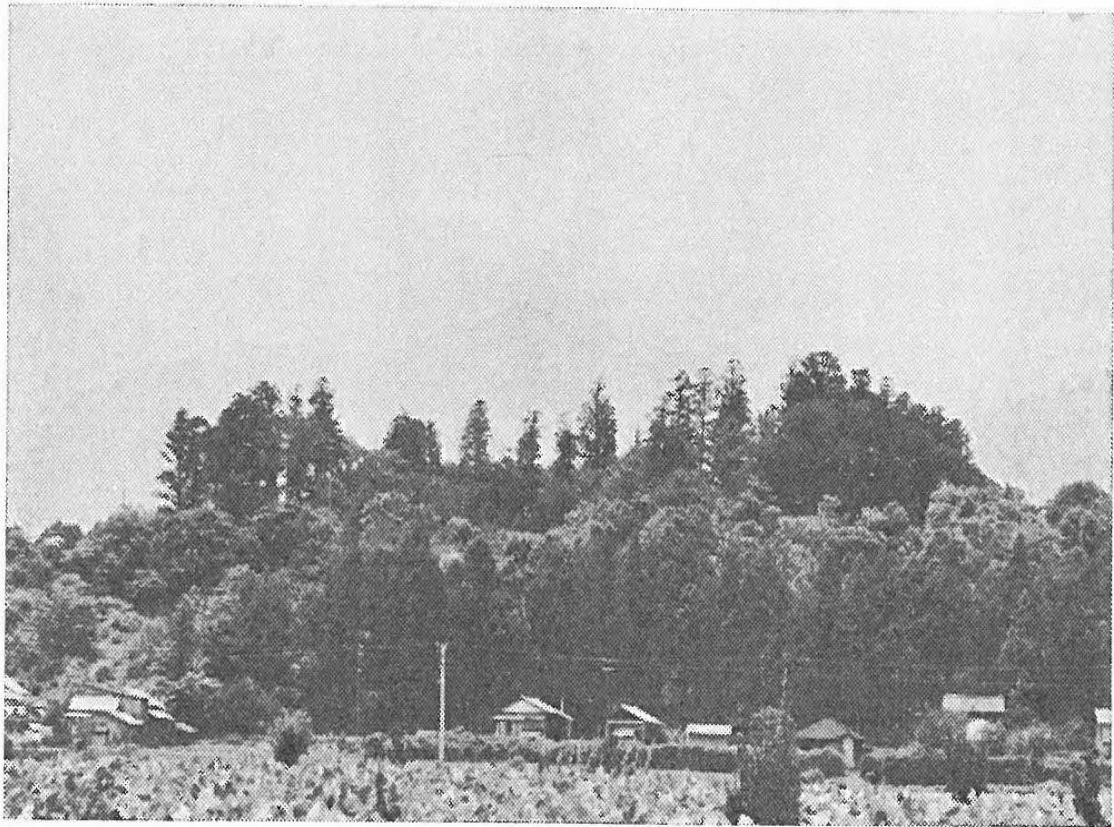
### 那珂国造の成立

五世紀に入り、水戸地方に変化をもたらした大和朝廷の勢力は、一世紀を経る間に、地方の開拓を推し進め、国家権力を拡大していった。この頃になると、この地方の豪族勢力は渡里町や愛宕山のあたりから、内原町に近い台地の方までひろがっている。その中心は内原町黒磯や牛伏・田島の古墳群をみると、この古墳群と愛宕山古墳の中間あたりにあたるのかも知れない。その勢力範囲は、東茨城郡桂村から御前山村あたりを北限として、東は勝田市から那珂湊市、南は大洗町から鹿島郡・行方郡、西は内原町あたりに及んでいた。中でも愛宕町にある愛宕山古墳は、この時期に雄飛した那珂国造の初祖建借間命の墓であろうといわれるだけに、極めて大きく、その勢力の程がうかがわれる。六世紀の文化の様子は、豪族に関する限り、この古墳に象徴されているといつてよい。

愛宕山古墳は那珂川を望む愛宕町の台地にある前方後円墳である。第四図のように、前方部を南に向けた、全長一四八メートル、前方部の巾九〇メートル、高さ八メートル、後円部の径八四メートル、高さ一〇メートル前方部の翼がよく張った、整った形の古墳で、西側には巾二五メートルの堀の跡がある。



第4図の1 愛宕山古墳・姫塚古墳実測図



第 4 図の 2 愛宕山古墳全景および愛宕山古墳・姫塚古墳断面図

おそらく作られたときには古墳の周囲に堀がめぐらしてあったと思われるから、堀を計算に入れると、全長は実に一九八メートル、前方部の巾一四〇メートル、後円部の巾一三四メートルの大前方後円墳となる。このような古墳は大和地方には多数あるが、常陸地方では、新治国造の墓といわれる石岡市高浜の舟塚山古墳が全長一八六メートル、久自（慈）国造の墓と考えられる常陸太田市島の梵天山古墳が全長一六〇メートルであるから、いかに大古墳であったかがわかるのである。発掘されないので、その内容はわからないが、埴輪円筒を二重ないし三重にめぐらしており、後円部の中間には段を設けている。この古墳にみられる埴輪円筒は、墳丘に露出したものを計ってみると、直径五〇センチ位あるから、高さは一メートルに近い大形のものであることが推定される。このような埴輪円筒も水戸付近の古墳からは発見されていない。

応神・仁徳・履中三天皇陵と比較して、この愛宕山古墳をどの位の労働力で作れるかを考えてみると、第一表のようになる。仮りに一人の労働力を一立方メートルとして、推定される土量は一〇万六一六〇立方メートルであるから、一日百人を駆使できたとしても、約三年の歳月を要したことになる。土砂を運んだばかりではない。墳丘を作るためには、質の違った土砂を交互に積重ね、墳丘の形を整え、堀も掘らねばならなかったし、また墳丘にめぐらす埴輪の作製も行なわなければならなかった。埴輪円筒はもちろん土師部（はじべ）の製作ではあったろうが、巨大な墳丘には二段ないし三段に、二メートル位の間隔で発見されているから、これまた容易な作業ではなかった。しかもその辺の古墳にみられるような小形の埴輪円筒ではない。直径約五〇センチ、高さ一メートルのものであれば、土質も選ばなければならず、また特別製の窯（かま）も作らねばならなかった。

古墳名		応神天皇陵	仁徳天皇陵	履中天皇陵	愛宕山古墳
所在地		大阪府南河内郡古市町誉田	堺市大仙町津	堺市神石町上石	水戸市愛宕町
墳 丘	前後の主軸の長さ	415m	475m	363.3m	148m
	前方端の巾	330m	300m	232.8m	90m
	前方丘の高さ	約 35m	約 27m	約 23m	約 8m
	後円丘の径	267m	245m	203m	84m
	後円丘の高さ	36m	約 30m	約 25m	約 10m
濠 (堀)	推定土量	1,433,960 m <sup>3</sup>	1,405,866 m <sup>3</sup>	609,779 m <sup>3</sup>	106,160 m <sup>3</sup>
	推定土量の労働力	1日1,000人 約4年	1日1,000人 約4年	1日1,000人 約1年8か月	1日100人 約3年
濠 (堀)	正面の巾	54~55m	約70m	約63.6m	25m
	後円の背後	30~40m	約70m	72.7m	側面 25m
	総面積	61.030 m <sup>2</sup>	134.570 m <sup>2</sup>	91.488 m <sup>2</sup>	約13.078 m <sup>2</sup>

第1表 仁徳天皇陵等と愛宕山古墳の比較 三天皇の陵については、梅原末治氏「応神・仁徳・履中三天皇陵の規膜と営造」書陵部紀要 1955年による。

このような雄大な古墳は水戸付近では、このほかには造られなかったが、それでも東茨城郡内原町牛伏の「かろうど塚」や舟塚古墳、同郡常澄村森戸の富士山塚、那珂湊市平磯・河子塚古墳など、百メートル前後の前方後円墳が造られているから、それらの古墳の築造に使役された庶民の負担は多大であった。

首長やその一族、上層階級の人々はこのような前方後円墳に葬られたが、また東茨城郡大洗町磯浜の車塚のような円墳（土饅頭）にも葬られた。この車塚は直径約九〇メートル、高さ六メートルに及び、墳丘には、埴輪のほかに、拳（こぶし）大の自然石（葺石という）を全面に載せて覆っている。一般に円墳の場合はほとんど直径一五メートル、高さ二メートル前後のものが多く、直径三〇メートル、高さ五メートル

位のものはいくつか少ない。このようなことから、円墳は首長の墓というより、その一族か首長に次ぐ地位の人々の墓とみる方がよさそうである。

五世紀から六世紀の墳墓は個人を葬った墓であった。しかしこの頃には、大和地方では大陸文化の影響を受けて、一つの墓に幾人もの死体を埋葬する、家族墓的な墓制が発達していた、家族墓というのは、現在の「かろうど」に似た墓で、墳丘の南に口を開いた石室を持ち、死者を葬むるたびごとに入口の扉を開いて、室内に木棺を安置したものである。

墓制がこのように変化したことは、生死の思想の変化を意味するものであろう。六世紀前半以前の人々には、死後の世界を空と海に求める考え方があったから、幾分でも空に近く葬むるためにも墳丘を築かなければならなかったのであろう。しかし、死者来世の考え方にたつと、死んだ者があの世において生活する必要を考えなければならなかった。そのため、副葬品がそれまで宝器的なものや、武器・武具類に限られていたのに対して、什器類が副葬されるようになり、埋葬にも家を象（かたど）った石室さえ現われるようになる。

茨城町駒渡のドンドン塚（7）は直径三〇メートル、高さ四・五メートルの円墳であるが、円墳の南麓に入口を設けた全長五メートル、巾一メートル、高さ一・七メートル位の横穴式石室があったし、久自国造の勢力圏内の東海村荒谷の舟塚一号古墳（8）では、前方後円墳の後円部の南側に同様な横穴式石室が営まれていた。また勝田市中根の虎塚では、堀の内部に舟形の石棺があったという例もある。舟形の石棺は、粘土槨のように横穴式石室を用いる以前の施設であったかも知れない。

（第八図の一参照）

愛宕山古墳が造られた六世紀になると、それぞれの地域に分権的な「国」を形づくるようになった。常陸地方では、仲（那珂）国の他に、



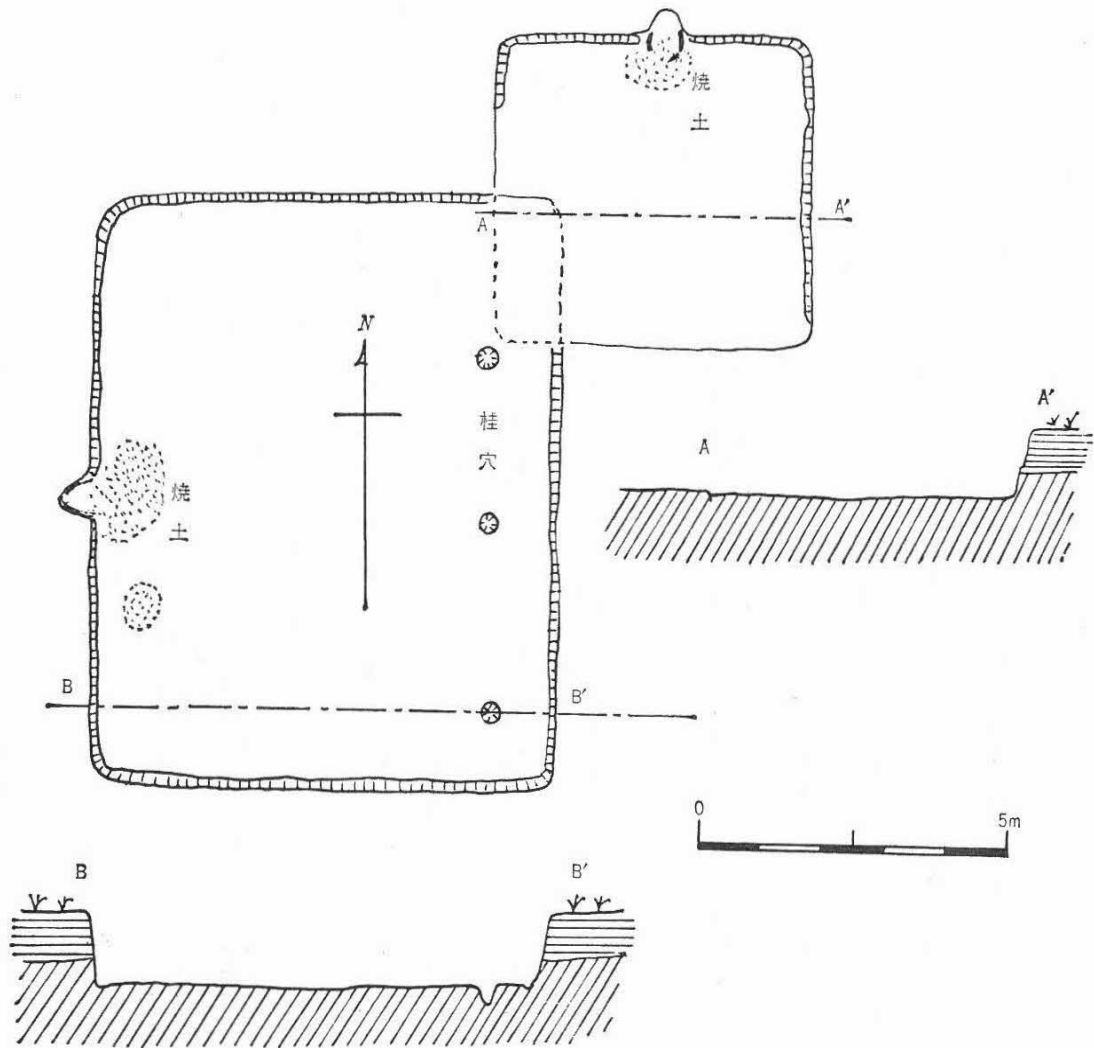
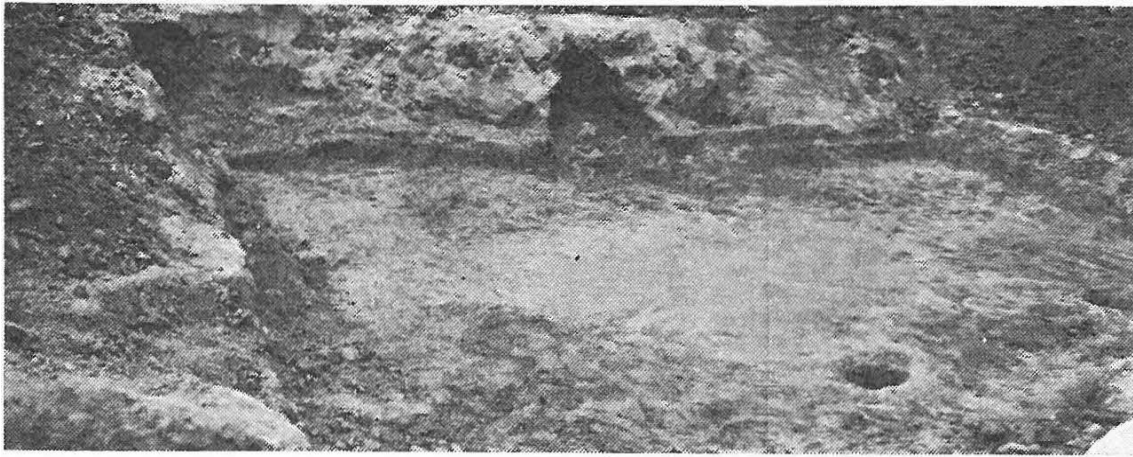
高（多珂）・久自（久慈）・新治・筑波・茨城等の国が存在した。この国を支配した首長は国造（くにのみやつこ）と呼ばれ、その下には職業別の集団があり、更にその集団内には奴隷などもいたらしい。各集団はそれぞれの氏上によって統率されていて、集団は氏上によって首長と結び付いていた。

## 六世紀の庶民生活

庶民の生活にも、この時期になると、かなり発展がみられるようになった。この時代は和泉式土器に続いた鬼高式土器の盛んに用いられた時期であるが、この時期になると、いままで豪族や上層階級にのみ使用されていた須恵器の一部が、ようやく庶民にも用いはじめられたらしい。また和泉式土器の時代には一つの炉が暖房用にも調理用にも用いられていたが、鬼高式土器の時代になると炉のほかに竈が現われるなど、生活向上の事実は明らかである。

東大野遺跡（9）では住居の形は明らかでないが、砂地やそれに近い地盤の上に粘土を張った床面土間があり、壺が三個出土している。また朱を前面に塗った皿が渡里町の浄水場の付近や柳河小学校庭で発見されている。

勝田市市毛遺跡（10）は、上大野遺跡が低地に営なまれたのに対して、那珂川北岸の標高三〇メートルの台地上にあり、表土下九〇センチのローム層内に、深さ約四〇センチ切り下げて、床面とした住居址が発見された。住居は一辺約五メートル平方位の隅丸（すみまる）方形の住居址で、北側の壁の中央部に竈があり、竈の北東部には十数個の土器や石器がおかれていた。また竈には甗が発見され、付近からは須恵器の破片が出土している。



第5図 柳河土師式住居址全景および実測図 - 柳河町 -

水戸地方からいくらか離れた西茨城郡岩間町押辺遺跡(11)も、この時代の住居址である。上大野遺跡が低湿地に、市毛遺跡が台地上にみられたのに対して、この遺跡は、涸沼川にのぞんだ標高一二メートル前後の緩やかな台地上に営まれている。

この住居址も、地表下一メートルのローム層に切り込んだ住居で、一辺四メートル位の隅の丸い方形の住居であった。ふしぎなことに床面には柱穴もなく、壁の周囲に排水溝もない。しかも床面の西側には三カ所ほど焼けたところがあって、その上に炭化した柱が一定の間隔に横たわって発見された。おそらく火災に遭ったものであろう。竈は東壁の中央よりやや南に片寄って作られてあり、床面の北壁の西に須恵器の破片や、磨製石斧・紡錘車・軽石を入れた甕・壺・坏・埴・甗などがおかれてあった。

以上の遺跡のほか、柳河小学校(第五図)や勝田市中根付近からも、この時期の遺跡が発見されている。鬼高式土器を出土する住居址は一辺四、五メートルの隅の丸い住居址に定まったようである。しかも住居址には竈が出現し、従来のように、住居址中央におかれた炉を暖房と調理に併用するような生活形態は、まったく消滅している。また使用された日用の器具も、土器については焼成がきわめて良く、和泉式土器のように、表面に見られた暗褐色や黄色の斑点もなく、円味(まるみ)を帯びた整った形のものが多。

この時代の特徴を要約するならば、須恵器を伴出すること、高坏の少ないこと、および甗をかならず出土することである。しかし水戸地方では、上層階級の生活を示す古墳から須恵器の出土の例はきわめてまれである。したがって一般庶民の住居址からの発見例も少なく、たとえ発見されたにしても、壺や坏のように、ごく限られた器形に止まったことは当然であろう。甗は和泉式土器には発見される例が少ない

器であるが、鬼高式土器を伴う住居址からは、ほとんどすべて出土している。和泉式土器に甗がみられないのは、弥生式時代にすでに農耕生活に入り、和泉式時代までかなり永い時期を経ながらも、米を蒸して食べる方法を知らなかったか、あるいは他の器を代用していたためであろう。そしてこの状態から鬼高式土器の時代に入ると、食生活の上に大きな変化が起こったことが考えられる。竈の出現はこの事実を裏書きするものであろう。また高坏の減少については、高坏が供献具（祭りに物を盛って供えるための用具）のみに用いられた土器であったから、鬼高式土器の時代になって、用に応じた土器がつくられるに従って、自然に消滅したものと思われる。

- 注 (1) 堀和勉氏採集による。茨城高校蔵
- (2) 大場磐雄氏「常陸鏡塚」（国学院大学古考学研究報告第一冊 昭和三十一年）
- (3) 茨城県教育委員会編「三昧塚古墳」 大塚初重氏「茨城県行方郡三昧塚古墳」（日本考古学年報 8、日本考古学協会編）
- (4) 同右「丸山古墳」後藤守一氏・大塚初重氏「茨城県新治郡丸山古墳」（日本考古学年報 5、日本考古学協会編）
- (5) 同右 昭和三十八年発掘 いはらき新聞による。
- (6) 伊東重敏氏「常陸国東茨城郡長岡村長岡遺跡略報」（常北考古学研究所学報 第九輯 昭和二十七年）
- (7) 昭和二十九年 茨城高校史学部発掘
- (8) 大森信英氏「常陸国村松村の古代遺跡」昭和三十年
- (9) 大森信英氏「上川名昭氏発掘」（昭和二十九年）大森信英氏「茨城県水戸市東大野町遺跡」（日本考古学年報 7 日本考古学協会編）
- (10) 県立那珂湊第一高校史学会「那珂郡勝田町市毛遺跡調査報告」昭和二十八年

- (11) 西連寺治氏「押辺堅穴住居址発掘調査報告」(水戸第一高校編 史窓  
月報 昭和二十九年)

## 第二節 水戸地方の古代社会の発達

六世紀から七世紀にかけて各地に存在した国造や、臣・連・伴造などとよばれた豪族は、五世紀以降表面的には大和朝廷に服従してはいたものの、山林原野を力にまかせて開拓し、強力な体勢を整えるようになり、ある者は大和朝廷にも劣らぬ勢力を持ち、各地に反抗さえ企だてる者も現われてきた。大和朝廷内部でも、皇位継承の問題や、蘇我氏のように強力な氏族の台頭が見られた半面、大陸政策の行き詰りもあって、早晩国家機構の改革を実施しなければならなかった。推古天皇の時、摂政となった聖徳太子は、仏教を興隆し、憲法十七条を定め、遣隋使を派遣するなど、国家の充実を企図したのであったが、太子の理想は徹底せず、強力な氏族の前には天皇の権威を回復するまでにはいたらなかった。しかし、大和朝廷再建の努力は、中国に派遣された留学生の帰国や、帰化人の来日によって高まり、七世紀の半ばには中大兄皇子を中心として大化改新が断行され、ようやく安定した政権の確立をみるにいたった。その後なおいくらかの変化はあったが、大和朝廷の勢力は次第に地方へ浸透していき、やがて奈良時代の盛時に及ぶのである。

六世紀の後半頃から、那珂国造の支配体制が極めて強固になったことは、古墳の調査からも推察できる。この時代に造られた古墳は、一つの地域に群集しており、いわゆる群集墳の形態をとっている。その例を那珂川流域の北の方から示すと、

桂村高根・常北町青山・水戸市藤井町十万原・同飯富町安土星・同堀

町野木・同元吉田町東組

同酒門町町付・同田谷町富士山・同下国井町権現山・同河和田町宮原・同加倉井町

などがある。このほか水戸市周辺地区には、勝田市津田・田彦・金上・三反田・中根十五郎穴、那珂湊市平磯町三ッ塚、茨城町森戸・下石崎、常澄村大場・六反田・金山塚、内原町牛伏・黒磯・田島などに分布している。これらの古墳群の中には、五世紀ないし六世紀の古墳に付随しているものもあるが、大半は六世紀後半以降のものである。これらの古墳のうち、特異なものについて述べてみよう。

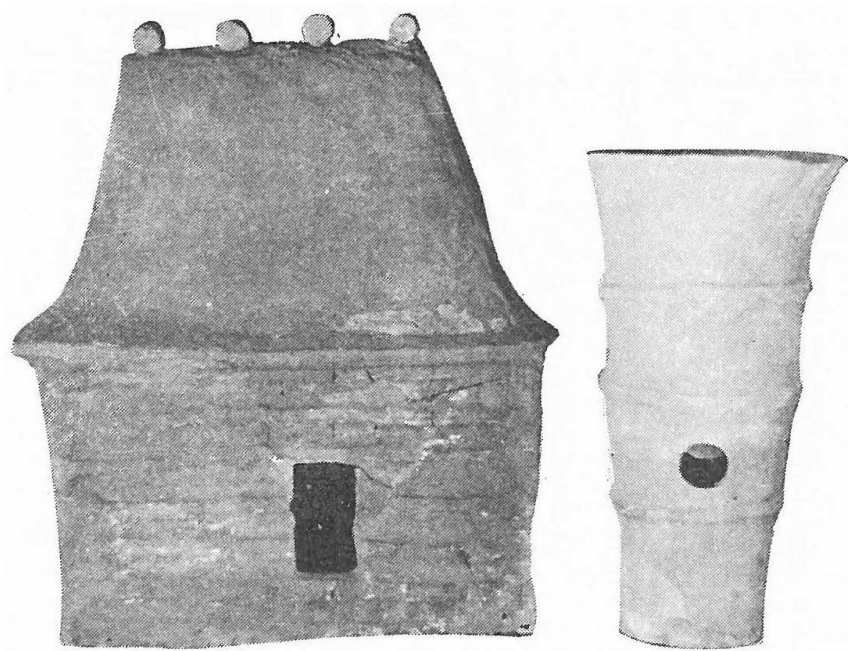
### 田谷町富士山古墳

那珂川左岸台地に入り込む七ツ洞池の台地上にあり、付近に五つの円墳がある。富士山古墳(1)は全長一八・一メートル、前方部巾五メートル、高さ一・六メートル、後円部径一二メートル、高さ二・六メートル、前方部を南に向けて営まれた前方後円墳で、那珂川流域に営まれた前方後円墳としては最も小さい古墳である。墳丘の東斜面から、かつて埴輪人物が出たことがあったが、昭和三十六年の発掘では、墳丘に一重の埴輪円筒がめぐらされていることを発見した。そして後円部の墳頂の下一五メートルの付近に、南北に巾八〇センチ、深さ三〇センチ、長さ二メートルの粘土槨が発見されただけで、副葬された遺物は一つも発見できなかった。この古墳と同様な例は東茨城郡常澄村大串の金山塚古墳に見られる。金山塚古墳では、墳丘上に埴輪円筒をめぐらしたこと、粘土槨を有すること、副葬遺物はわずかに刀子のみであったことなど、富士山古墳と同様であった。この富士山古墳の東南に直径二〇メートル、高さ二・三メートルの円墳がある。この円墳では埋葬施設は発見されなかったが墳丘の西に二五センチの距離をおい

て埴輪円筒を立て、その次に二〇センチの間隔に埴輪円筒を二基ならべた後、円墳の周囲に三メートルの間隔をおいて円筒を配していた。入口と思われる埴輪の西北に、堅魚木（かつをぎ）を載せた埴輪家一基と埴輪馬が発見された。



第6図 富士山古墳埴輪円筒列



富士山古墳出土埴輪家・および円筒

第六図はその埴輪家の写真であるが、復原した大きさは間口五〇センチ、奥行二八センチ、高さ六二センチで寄棟（よせむね）造、校倉（あぜくら）を思わせる間口には、長方形の窓が両側に一個ずつ付けられ、棟には四個の堅魚木が載せられている。古事記の雄略天皇の条

に、志幾（しき）の大県主（おおあがためし）の家に、堅魚木が載せてあって、それが皇居に似ているという理由で咎められたとあるから、堅魚木を載せた家というのは、よほどの豪族でなければ住めなかったのかも知れない。

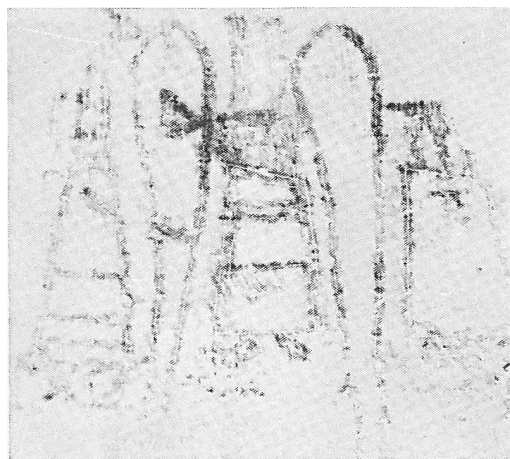
時代が下ったとはいっても、堅魚木を載せた埴輪家を墳丘に埋めた、この円墳に葬られた人は、かなり高い身分の人物と推定してよかろう。この埴輪家と同様なものが行方郡下から一基出土例が報告されている。

## 石室の壁画

元吉田町の明利酒造会社の北側に、竹やぶになった直径八メートル、高さ一・五メートル位の円墳（2）がある。死体を埋めた石室の奥に、壁画が描かれている、珍しい古墳であるところから、大正十一年（一九二二）三月に内務省指定の史蹟（現在は重要文化財）になった。盛土が崩れて、石室の一部が露出しているが、造られた時は、直径一二メートル、高さ三メートル近い円墳であったと推定される。死体を埋葬する施設は、粘土槨でなく、横穴式石室といって、砂質凝灰岩の切石を積重ねて、長さ三・七メートル、巾一・四メートル、高さ一・七メートルの石室（いしむろ）を作り、その内部に木棺を安置したらしい。木棺を安置したところと入口の部分では、入口の方が狭まり、入口は南の墳丘に開いている。死体を入れ、入口には石を積重ねて蓋とするわけで、このような埋葬施設が、六世紀の後半頃からあらわれたのである。一般に、この横穴式石室の場合、入口の部分を羨道（せんどう）、死体を入れたところを玄室（げんしつ）といって、羨道部は巾が狭く、高さも低くつくられている。石材は地方により、また時代によって異なり、自然石や切石を用い、凝灰岩のほか、硬砂岩・花崗岩・粘板岩・緑泥片岩・頁岩も用いられている。吉田古墳からは鉄刀・メノウ製勾玉・金環



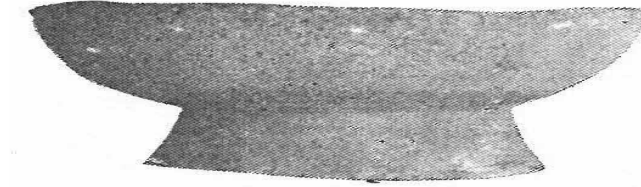
(イヤリング)等が発見された。問題の壁画は釘のようなもので、奥壁全体に陰刻している。(第七図)中央上部に二振の刀子を描き、その下に五本の鏃(やじり)を入れた鞆(ゆき)を配し、その左右に鉾を、右端には鞆を陰刻している。左端にも陰刻があるが明らかでない。この壁画が故人を追悼するために描かれたものか、呪術的なものか、あるいは単なる装飾のためかわからないが、下国井町権現山下の横穴を調査した際にも発見されたし、勝田市金上・那珂町木崎・常北町増井・常陸太田市幡町・久慈郡金砂郷村にもその例があり茨城県内だけでもすでに九例を数えるにいたった。このように壁画のある古墳を装飾古墳というが、北九州地方に多いことを考えると、その伝播と強い関連があると思われる。



第7図 吉田古墳壁画

またこの横穴式石室を持った古墳には、藤井町十万原や、元石川町江東・藤井町清水台・堀町野木・酒門町町付・常澄村栗崎・那珂湊市平磯町三ツ塚・勝田市中根虎塚・金上黄金塚などがあり藤井町十万原の古墳からは須恵器壺が発見されている。那珂郡瓜連町静、新宿古墳(3)では、一〇体を一つの石室に葬った例もある。この時期の前方後円墳にはまだ埴輪が埋められているのが普通である。なお、昭和二十六年

に発掘された堀町野木の古墳からは、高台を有する埴（第八図）が出土しているのは注目すべきことである。

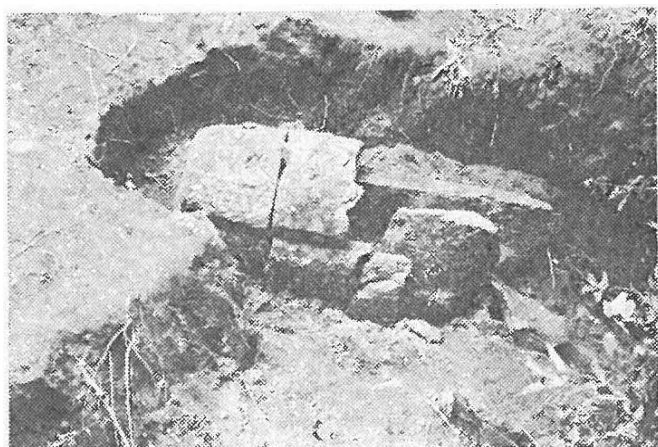


第8図 堀町第2号古墳出土国分式土器

### 地下の古墳

堀町の長者山に近いところの畑の中に、盛土のない古墳が一基あった（4）。（第六号古墳）この古墳では横穴式石室に近い、全長三・五メートル、巾一・七メートル、深さ四〇センチの粘板岩を用いた石室が発見された。入口がなく、長方形の石室である。副葬品にはメノウ製の勾玉三個・碧玉製の管玉一個・ガラス製の丸玉七個・滑石製の丸玉一個・棗（なつめ）玉一個が出土したが、副葬品は吉田古墳のばあいとほとんど違いはない。石室は横穴式石室というより、竪穴式石室に近いようである。現在封土はみられないが、作られた時にはあったと考えてよい。（第一〇図）

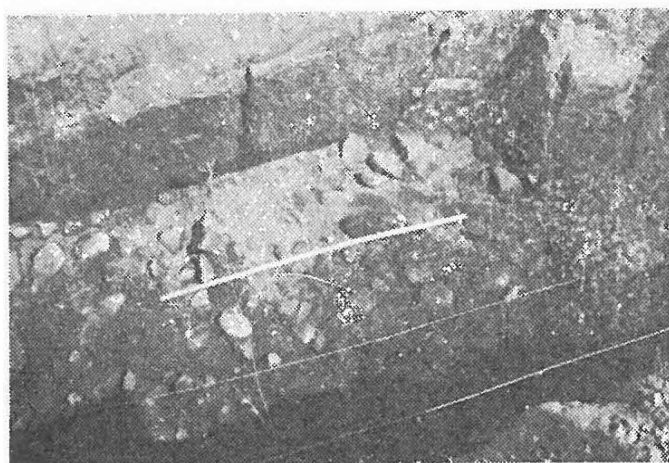
下国井町の一古墳（5）は下国井町の七ツ洞池の西北の山林の小径の下にあり、緑泥片岩の切石を組合わせた石棺が発見された。この古墳も封土はないが、もとは直径一二メートル、高さ三メートル位の盛土をもった円墳であったと思われる。石棺は地表下七〇センチのところに、全長一・八メートル、巾四八センチ、深さ四〇センチの規模を持っているが、盗掘されたようで、遺物は何もなく、底に自然石が並べられているだけであった。この規模ではようやく死体を入れることができる状態であるから、横穴式石室のような家族墓的なものではなく、個人墓として作られたものである。



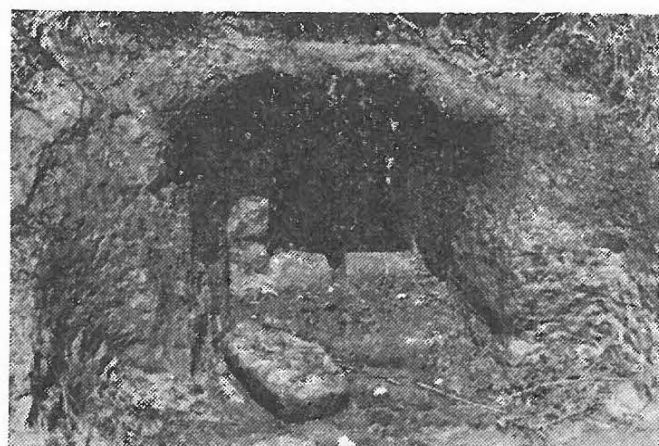
1



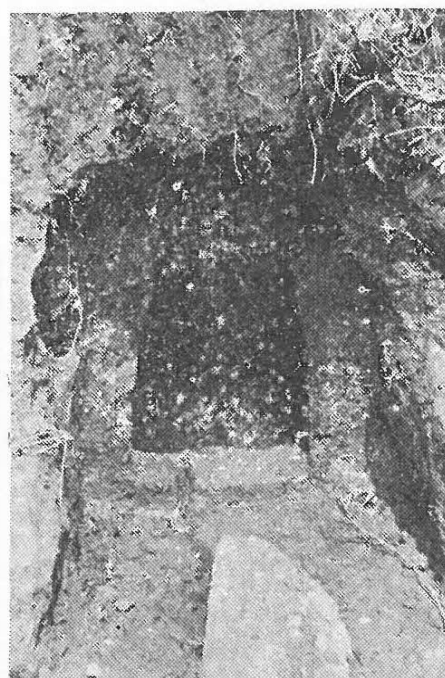
2



3



4

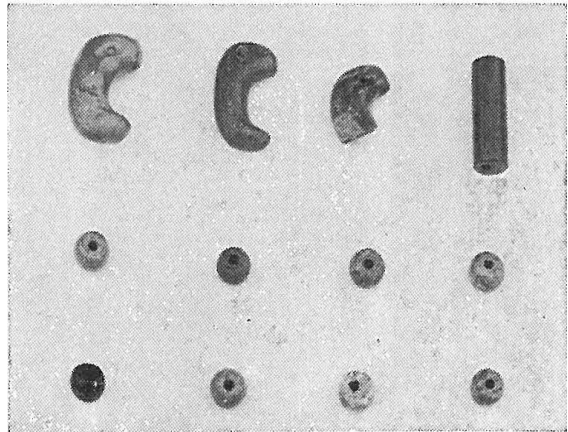


5

第9図 水戸付近古墳内部構造 (1. 勝田市虎塚 2. 田谷町葺石古墳  
3. 堀町第5号古墳 4. 5. 権現山横穴)

このような埋葬施設を「組合せ箱式石棺」とか、単に「箱式石棺」とよんでいる。箱式石棺は常陸では行方郡玉造町三昧塚のように古い古墳にも見られるが、利根川以東から水戸付近の古墳では六世紀後半以降、七世紀のものに多いようである。行方郡潮来町大生の孫舞塚古墳

(6)・同郡北浦村堂目木一号古墳  
 (7)・同郡麻生町小高南古墳(8)・  
 那珂湊市平磯町三ッ塚第一号古  
 墳(9)・第七・第八・第九・第十  
 一号古墳などはいくらかの違い  
 はあっても、この形式の古墳であ  
 るといえる。

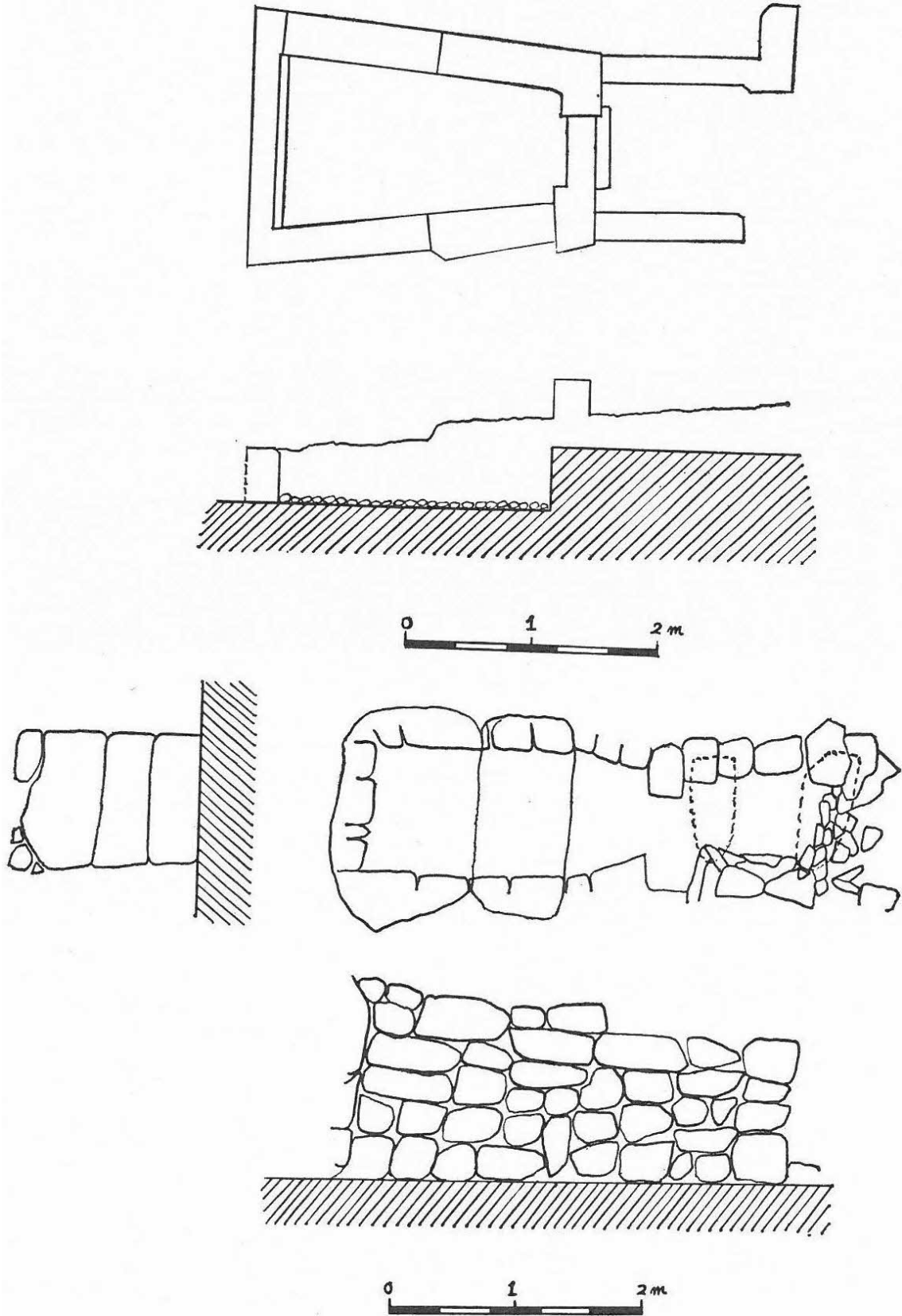


第 10 図 堀町第 6 号古墳出土遺物

また昭和三十八年八月、勝田市津田、西山(10)で発掘した前方後円墳と三基の円墳も、この形式の古墳であった。前方後円墳は、その規模といい外部施設といい、さきに述べた田谷町富士山塚古墳や常澄村大串・金山塚古墳と同一であったが、その内部構造は地下約八一センチに営まれた木炭槨であった。木炭槨の大きさは全長四・三メートル、巾一メートルで内部には全長六八センチの鉄剣と鉄鍬・刀子が一括して発見された。

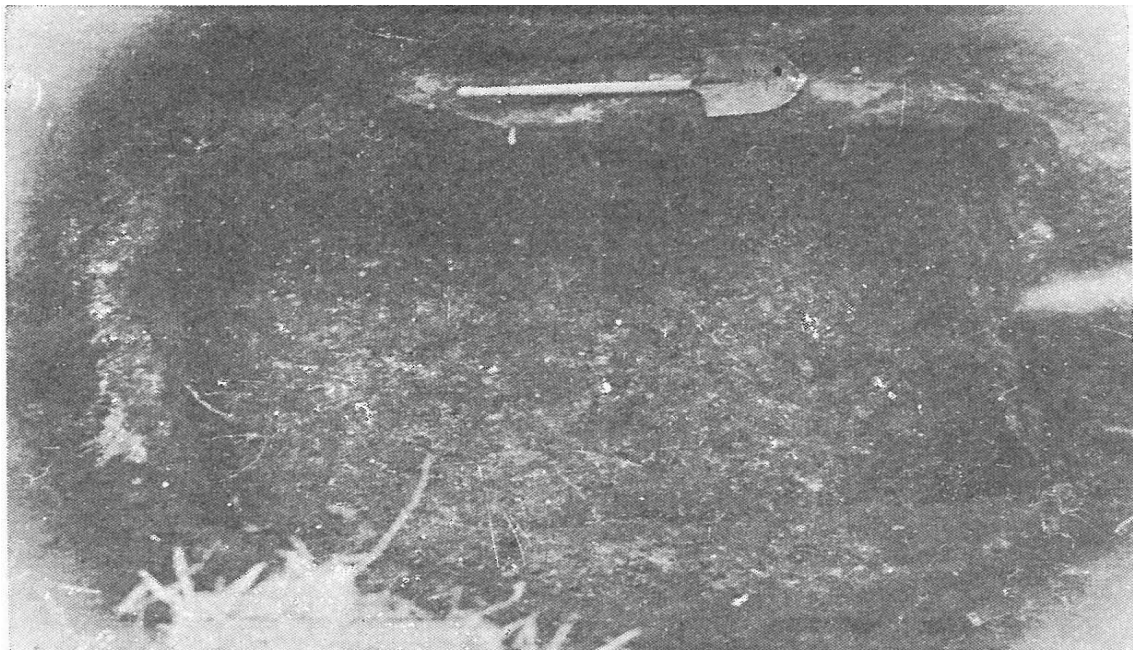
木炭槨は粘土槨の変形したものと考えられ、県内では東海村村松の日本原子燃料公社構内からも発見されている。

他の三基の円墳は、いずれも直径一五メートルないし二〇メートル、高さ二メートル前後の規模をもち、その内部構造は前方後円墳同様、地下約七〇センチ前後の位置に営まれ、粗雑な凝灰岩を周囲に配した粘土槨である。



第 11 図 古墳石室実測図 (上) 堀町第 2 号古墳 (下) 十万原古墳

その手法は行方郡麻生町小高南に発見された前方後円墳の内部構造に類似するものであった。この古墳の中の一基からは、鉄鏃・刀子が一括して出土しているが、かつて破壊された付近の古墳が、すべて表土上に横穴式石室をもつものであった、ということからすると、水戸市に近い津田、西山古墳の例は、注目すべきものと考えられる。



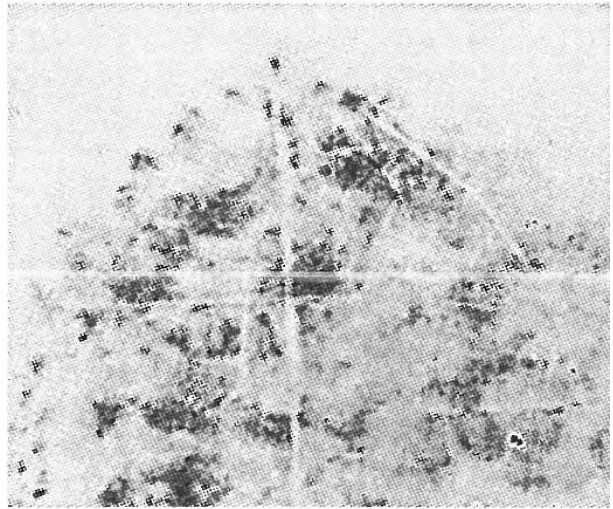
第 12 図 堀町第 4 号古墳内部構造

### 素掘りの古墳

堀町野木の第四号古墳(11)は、水戸付近では例のない、素掘りの埋葬施設をもつ古墳であった。この古墳は前方後円墳の丘麓に接して、その北西に営まれている。封土の直径は九メートル、高さ一・三メートルの小円墳で墳丘の下六〇センチに、ローム層を南北に掘り込んで全長一八メートル、巾九〇センチ、深さ六〇センチの内部構造を造っている。その構造が単にローム層を掘り込むという簡単な手法であることから恐らく木棺を直接埋葬したものであろうと考えられる。終末期の古墳の姿を止めたものであろう。(第一二図)

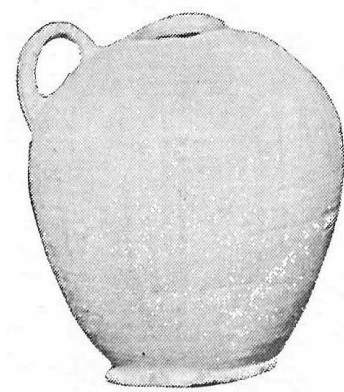
## 横穴の古墳

新編常陸国誌に「那珂郡下国井村ノ溜池ノ傍ナル山涯ニアリ、天明七年（一七八七）春土人池ヲ浚へ垠ヲ修スル時ニ、岸ニ岩ヲ穿チケルニ、石窟相並デアリ、各方六尺バカリ、入口ニハ柱敷居鴨居ノ如クニ彫テ、岩ヲ以テ戸トス、内ハ空虚ニテ、下ニハ小石ヲシキタリ、一方ヨリ行基焼（須恵器）ノ壺ヲ出セリ、其他物アルコトナシ云々」と伝える横穴が下国井町七ツ洞の溜池にある。（第一三図）昭和三十七年にその四基を発掘したが、江戸時代に発見された横穴が、四基のうちにあるかどうかは明らかでなかった。今まで述べた古墳は盛土を築いて作られたものであるが、この古墳は池端に露出した凝灰岩をくり抜いて作つてある。四基ともほぼ同じ大きさで、長さ二・八メートル、巾一・七メートル、高さ一・五メートル前後で、入口の前にはテラス状の付属物がある。入口は巾四〇センチ、高さ七〇センチ位のアーチ状をなし、入口の底は高さ一五センチ位上り、中央に排水用の巾一〇センチ前後の溝が掘つてある。内部も壁の周囲に排水溝がある。この四基の横穴からは、水晶製の切子玉・ガラス製の小玉・金環・須恵器提瓶・土師器坏（つき）などが発見されたが、第一号横穴と第二号横穴からは兜（かぶと）の形やその他形の不明な壁画が発見された（12）。このような横穴は那珂町戸や勝田市中根十五郎穴・茨城町東永寺にも発見され、常陸太田市などには五百位あることが確認されている。特に中根十五郎穴の蔵骨器や方頭大刀の出土は、この横穴の造られた年代が、奈良時代であったことを示している。またさきに述べた内原町の牛伏・黒磯には「かろうど塚」や舟塚古墳のほかに、六世紀後半以降八世紀にいたる時期にかけて造られた前方後円墳のみでも、富士山・十二所神社裏古墳など五基の古墳があることは、この牛伏、黒磯古墳群が、那珂国造を考える場合、極めて重要であることを示している。



第 13 図 権現山横穴古墳全景および壁画拓影





第 14 図 宮町出土蔵骨器

以上のように、六世紀以降になると古墳の埋葬施設は、きわめて豊富な様相を示すのであるが、七世紀から八世紀に下る古墳もかなり多いことがわかる。生活の向上により、割合身分の低い人達まで古墳を営んだことも考えられるが、遺物の少ない理由には、死者来世の思想のほかに、大化改新の薄葬令や、仏教の影響などであろうと推定される。渡里町や堀町、中根十五郎穴に発見された蔵骨器、宮町東照宮裏（第一四図）、谷田町出土の火葬骨壺（13）などはよい例である。

庶民の墳墓はこの時代になっても明らかでないが、依然として土葬であったと考えてよい。最近筑波郡谷田部町（14）に百数十基の小円墳が発見されたが、あるいは庶民の墓を示すものかも知れない。内部構造はおそらく堀町の第四号古墳と同様であろう。六世紀の後半から七世紀には、水戸ではすでに仏教文化の浸透が見られ、渡里町台渡には徳輪寺が建立されていたが（次章第四節参照）、他方この寺の間近かに、堀町第二号古墳が造られていたのである。それはこの古墳から国分式土器が出土していることによって明らかである。（第一〇図）

古墳時代の後期は、群集墳が発生したように、社会生活全般に発展の見られた時期であった。中期の文化が鬼高式土器によって示されたように、この古墳時代後期の庶民文化は、国分式土器によってあらわ

すことができる。鬼高式土器が古墳時代中期の土器であり、国分式土器が七世紀以降の所産であるならば、なおこの間に一つの文化期が求められそうである。しかし、この文化期は水戸周辺では今のところ明らかではない。

国分式土器は古墳時代から奈良時代にかけて、広く庶民生活に用いられたため、この土器だけでは遺跡の年代を決定しにくいものもある。国分期の住居は、鬼高式土器に伴う住居よりも一段と進歩し、定形化したようである。この時期の住居は、那珂川流域のあらゆる場所に、土地の高低にかかわらず発見されている。そのうち最も代表的な遺跡としては、元吉田町の県立水戸南高校校庭遺跡・上国井町旧飛行場遺跡・東町遺跡があり、また常澄村大串遺跡も有名である。次に、これらについて説明しよう。

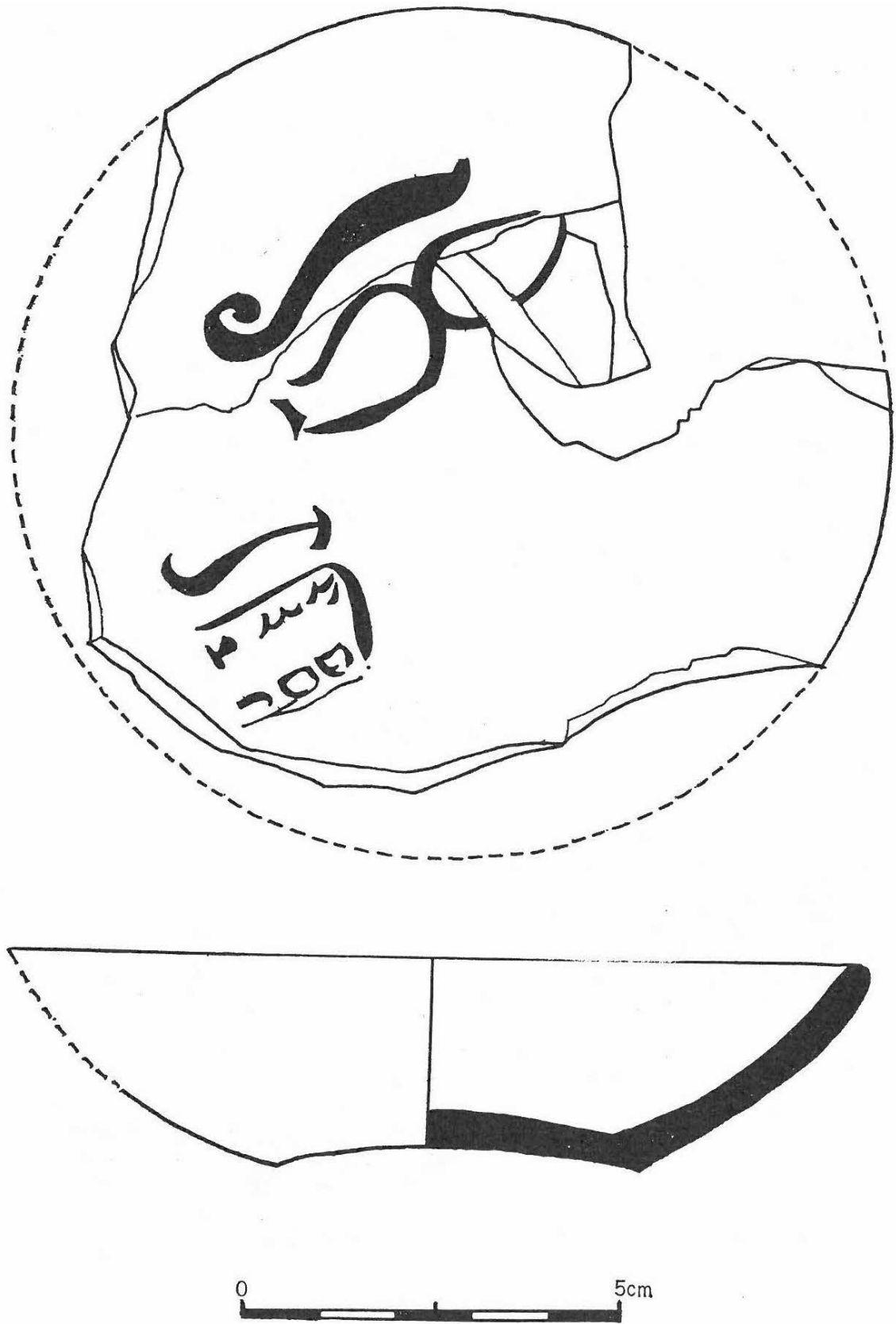
## 国分期の遺跡

〔県立水戸南高校庭遺跡（15）〕 今から二〇年ほど前、一辺約四メートル平方前後の隅丸方形の住居址が発見された。その遺跡に竈や排水溝、柱穴があったかどうかは明らかでないが、しばらくの間、原形のまま保存されていたと思う。また校庭の西側に薬王院に通ずる道路があるが、この道路の東斜面にも戦後になって、住居址の一部が露出していたことがあったから、住居址群があったものと思われる。

〔上国井町旧飛行場跡遺跡（16）〕 那珂町戸に接する飛行場内に、二〇数個の住居址があった。十年前調査のときの状況では、飛行場建設の際表土を削られてしまっていたため、住居址は全部床面より十センチを残すだけであり、竈の有無は明らかでなかった。住居址はほとんど五メートルから七メートル前後の隅の丸い方形の住居で、壁に沿って巾一〇センチ、深さ五センチほどの排水溝をめぐらしてあった。



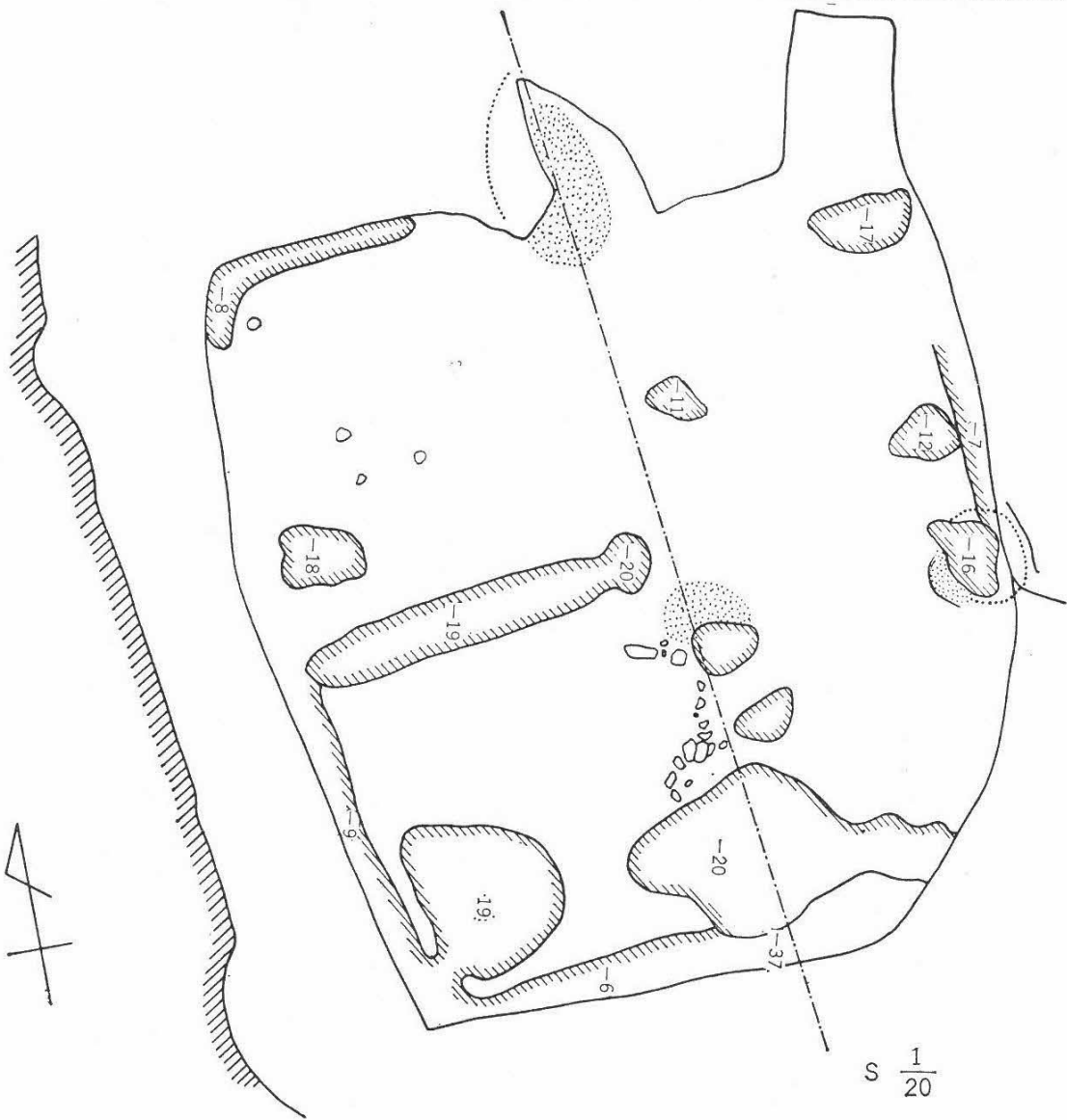
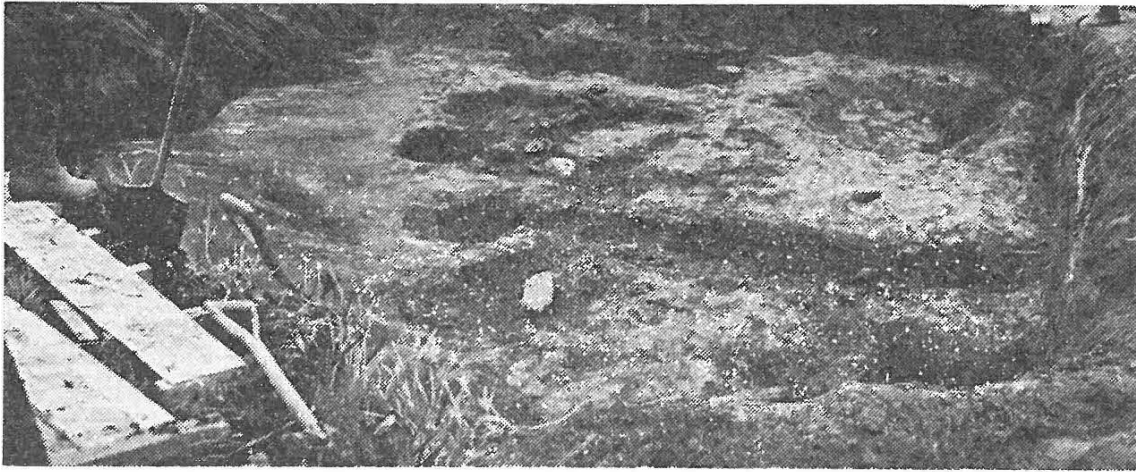
第 15 図 阿川出土鉄製鎌・砥石および坏 - 上国井町 -



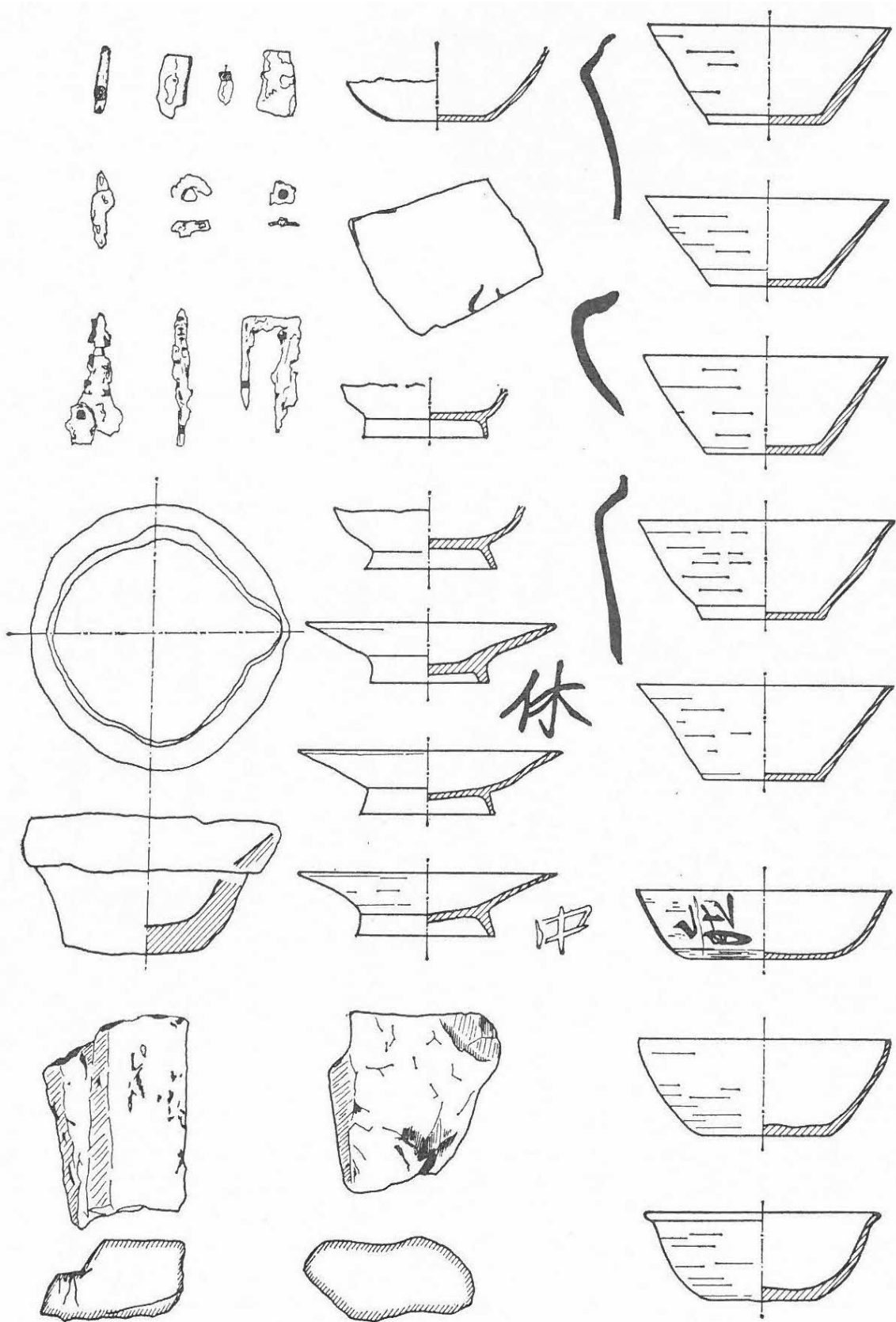
第 16 図 大串・殿山土師式住居址出土土器実測図 一常澄村一

柱穴を欠くものもあるが、直径一五センチ、深さ三〇センチ位の四本の柱穴をもつものが多い。炉は中央にある。住居址内部からは土師器・壺・甕・坏・須恵器坏や、鉄製のひねり返しのついた鎌と砥石（第一五図）が発見されたが、土師器の中には墨で銘を記したものもあった。常澄村大串遺跡（17）は旧稻荷中学校の枚庭に発見されたものであるが、この遺跡の住居址の形態も、上国井町遺跡とほとんど同様である。この住居址から出土した遺物中、第十四号住居址出土の土師器皿に描いた人物戯画は注目すべきものである。東大寺所蔵の大々論の人物戯画の手法とよく似ていて、当時をしのぶよい資料といえよう。（第一六図）

〔東町遺跡（18）〕 県営プールの観覧席となったあたりに東西四メートル、南北五メートルの隅丸方形の竪穴址があった。中央の炉付近には焼きの悪い瓦状の粘土を数枚積重ねたコの字状の囲みがあり、炉の付近から西壁にかけて、巾四〇センチ、深さ二〇センチ、長さ二・六メートルの溝が壁に直角に掘られてあり、壁の周囲にも排水溝があった。柱穴は大小九個あり、南北に併行して設けられていたようである。床面には木炭の粉末が散乱し床面は一面に焼けただれていた。竈は北壁の中央部にあり、全長一・四メートル、煙道の径六センチ傾斜角は二三度で、焚口は床面に掘り込んで作られ、竈全体の高さは七〇センチである。（第一七図）またこの住居址の北壁に巾〇・八メートル、長さ一メートルの張り出しがつけられている。この張り出しは、何のために付けられたものか明らかでないが、出入り口であったかとも想像される。上国井町や大串遺跡にも発見されているが、余り多くはない。



第 17 図 東町土師式竪穴址全景および実測図



第十八图 東町土師式豎穴址出土遺物実測図

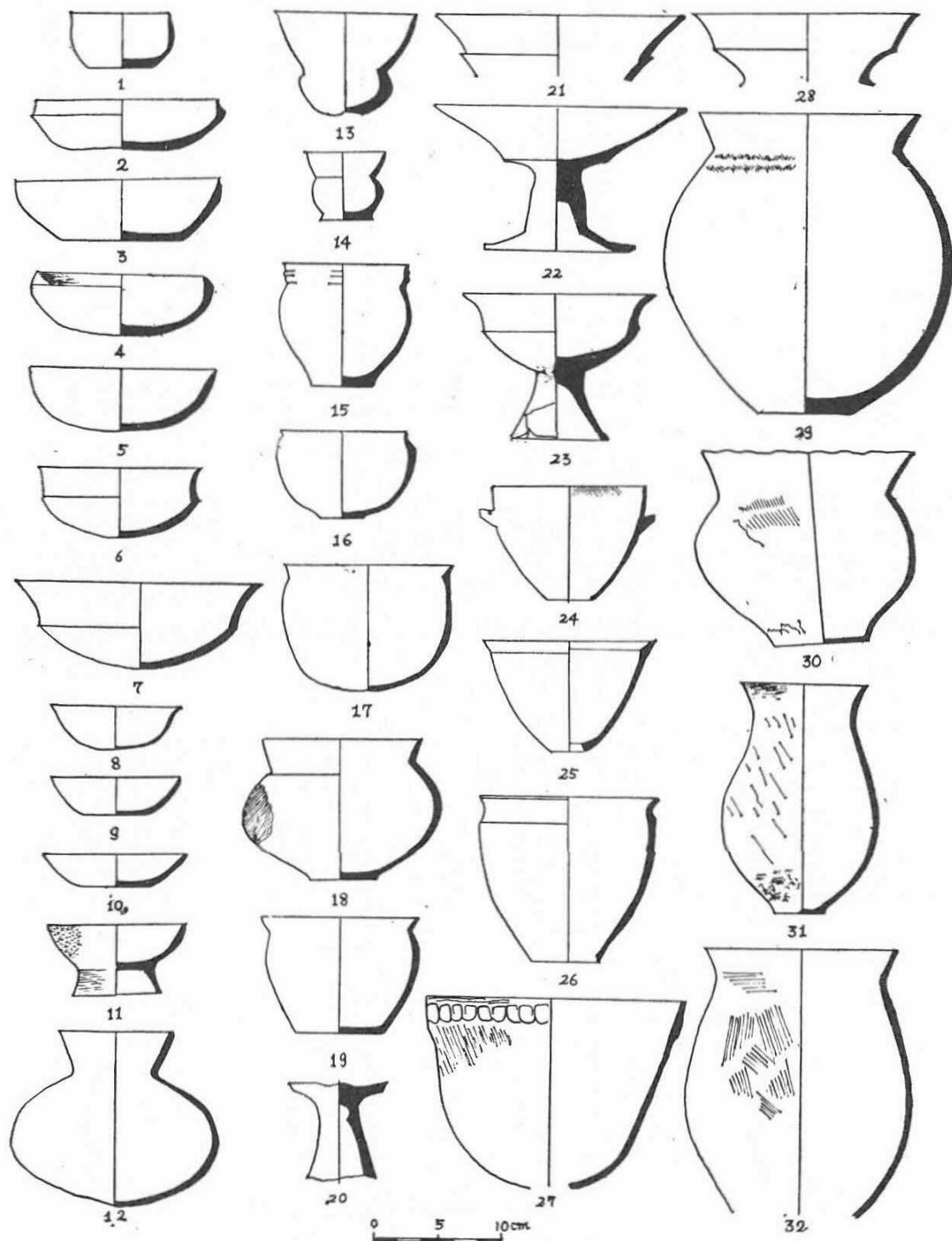


第 19 図 東町土師式竪穴出土埴

遺物は、住居址内の南隅の排水溝の上に密着して、片口の埴と青銅金具片が発見されており、また北壁に沿って、床面からは青銅金具片のほかに鉋（かすがい）と思われる鉄製金具片三個が出土している。中央の炉からは鉄＝も発見された。土器は片口の埴の他に、埴（つぼ）・盃（まり）・台付埴・皿などの土師器と、台付皿・坏・小口埴などの須恵器が出土し、その中には胴部の底に「休」・「荘」・「中」などの墨書や篋書が書かれたものも見られる。（第一八図）とくにこの住居址から出た片口の埴（第一九図）が、京都府相楽郡加茂町銭司出土の埴塙（るつぼ）とまったく同一であることは注意してよい。

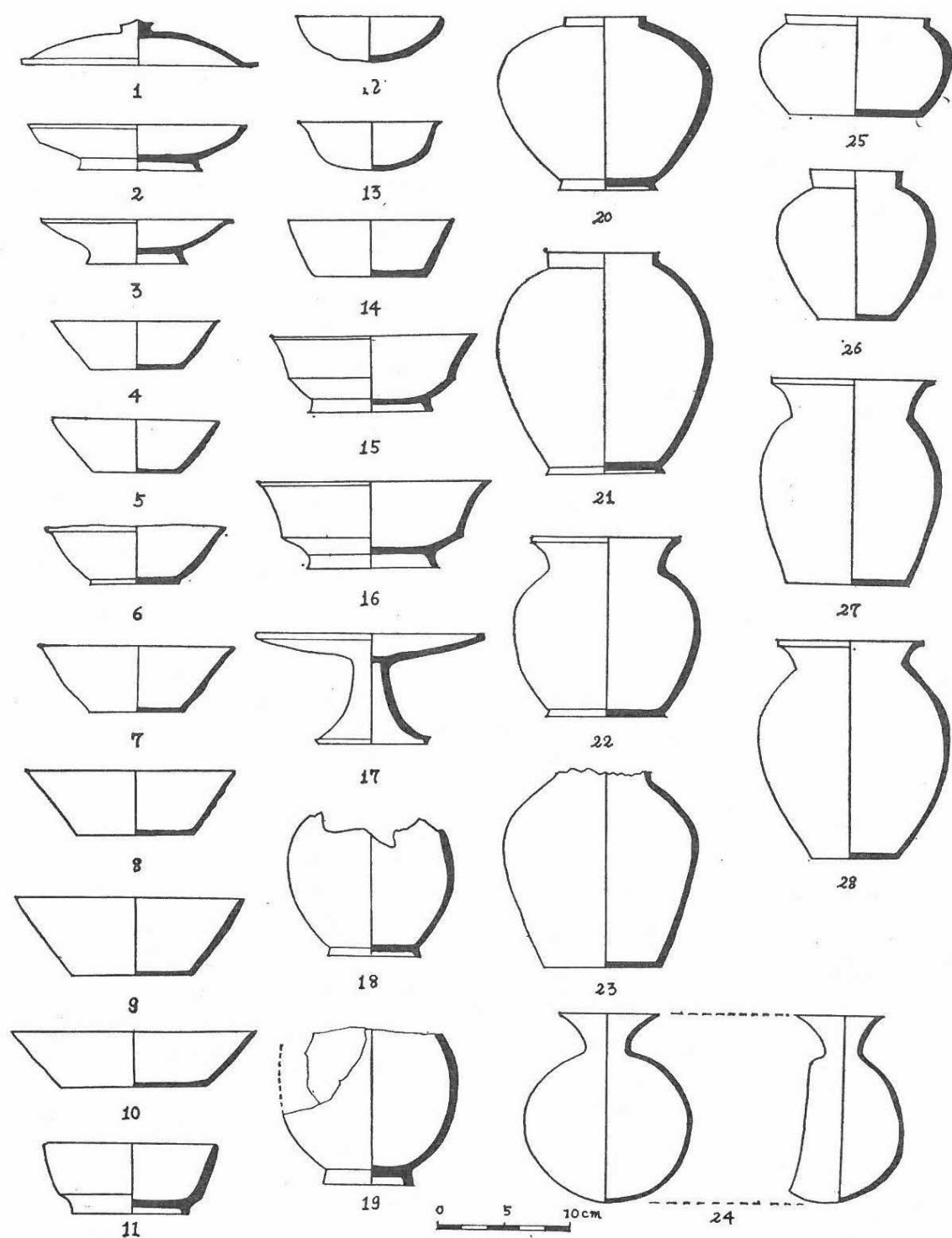
鉄＝・青銅金具片の出土、中央炉から西壁に見られる溝が、室内の仕切り跡とすると、単なる住居址ではなく、製造址か、工房址のようにも考えられる。この住居址の西にも多数の住居址があったらしく、ブルトーザーの作業跡におびただしい須恵器や土師器片が発見された。須恵器が多く出土していること、集落の大きさが二百メートル平方に及んでいることは注目すべきである。





第 20 図 那珂川流域出土土師器実測図

1. 13. 14. 15. 16. 21. 22. 29. 茨城町長岡 2. 3. 4. 23. 24. 31. 勝田  
 市市毛 5. 下国井町横穴第 1 号 6. 7. 30. 渡里町 8. 9. 10. 17. 19.  
 28. 飯富町 26. 常澄付大串 (24. 25. 26. 31. は縮尺×2)



第 21 図 那珂川流域出土須恵器蔵骨器実測図

1. 2. 3. 6. 15. 16 渡里町 4. 5. 7. 10. 12. 13 上国井町 8. 9 東  
町 14. 17 飯富町 13. 19. 20. 21. 22. 23. 25. 26. 27. 28  
堀町（蔵骨器）24 下国井町 25 出土地不明

この時期の土器は轆轤（ろくろ）の使用が一般化し、器形はよく整い、表面には篋による整形の痕を残すものもある。底は平底で糸切痕が見られる。土師器の他に須恵器坏が多く伴出することは、食器として、須恵器が土師器に代わりつつあったことを示すものであろう。木葉下町三ヶ野には数十に及ぶ窯跡（19）があり、一〇世紀頃まで須恵器や瓦の製作が行なわれている（次章第四節参照）。このことは西茨城郡岩間町大字土師や、この三ヶ野などに、職業集団としての土師部（はじべ）のあったことを推定させる。

## 那珂国造の雄飛

五世紀以降の那珂川流域に国家を形成し、古代文化の基礎を築いた氏族というのは、どのような部属であったのだろうか。「常陸国風土記」・「古事記」・「日本書紀」などの文献と、古墳調査の結果を基にして考えてみよう。

常陸国風土記行方郡の条に、「古老ノ日ヘラク、斯貴（しき）ノ瑞垣（みづがき）ノ宮ニ大八洲（おおやしま）知ラシメシ天皇（崇神天皇）ノ世ニ、東ノ夷ノ荒ブル賊ヲ平ケムトシテ、建借間命（たけかしまのみこと）（ヤガテ那賀国造初祖ナリ）ヲ遣り給ヒキ」（原文は漢文）とあって、崇神天皇の御世に、建借間命が朝廷の命を奉じて東夷を討ったが、反抗がきびしかったので謀略をめぐらし、杵島曲（きしまぶり）（火の国の民謡）をうたって賊を平定し、やがて那珂国造に任ぜられたとある。

この記事によって那珂国造にはじめて任ぜられた人が建借間命であることがわかる。それでは建借間命はどのような人であったのだろうか。

国造本紀には、「仲国造、志賀高穴穗朝御世（成務天皇の朝）〔以〕

伊予国造同祖、建借間命定賜国造」とみえ、また同紀伊予国造のところには、「印波国造同祖」、また印波国造の条には、「神八井耳命八世孫」と記してあるほか、火国造の条にも「大分国造同祖」、阿蘇国造の条には「火国造同祖」、「神八井耳命孫」などとも見えている。

古事記（中巻、神武天皇、白禱宮の段）には、建借間命等の祖、神八井耳命を記して、「神八井耳命ハ、意富臣（おおのおみ）、小子部連、坂合部連、火君（ひのきみ）、大分君、阿蘇君、筑紫三家連、雀部臣、雀部造、小長谷造、都邪直、伊余国造、科野国造、道奥（みちのく）ノ石城国造、常道（ひたち）ノ仲国造、長狭国造、伊勢ノ船木直、尾張ノ丹羽臣、嶋田臣等ガ祖也。」とも述べてあり、仲国造が神武天皇の御子、神八井耳命を祖とし、火君・阿蘇国造・石城国造・意富臣と同祖であることを示している。

ところで、仲国造（20）の初祖建借間命はもと火国造家から別れた意富臣の一族であり、その同族が肥の国（火国、今の熊本県地方）を中心に根拠をもち、やがて大和に入り、さらに朝廷の命を奉じて東国にその勢力を扶植したという説がある。

建借間命が行方郡において荒ぶる賊を討った際、歌った杵島曲は、風土記逸文、肥前国の条に、杵島（きしま）として、

「(霰フルキシミガタケヲサカシミト草取りカナワ妹が手ヲ取ル) 此ノ歌、肥前国風土記二見エタリ。杵島ノ郡、県ノ南二里ニーツの孤山アリ。坤（ひつじさる）（西南）ヨリ良（うしとら）（東北）ヲ指シテ三ツノ峰相連ル。コレヲ名ヅケテ杵島トイウ。云々」とあって、この山に春秋に老若男女が相たずさえて登り、楽しく飲みかつ歌い舞ったと伝えられている。東方に遠征した建借間命らの一族が、望郷の想いを故郷の歌に託して歌ったのであろうと思われるが、同族が肥国の出であったことを伝えたものでもあろう。建借間命は行方に荒ぶる神を討った後、

どのようにして仲国に進出したものであろうか。この間の事跡は、古文献にはあまり明らかではない。ただ常陸国風土記茨城郡条に「此時大臣族黒坂命云々」の記事があり、黒坂命の活躍を伝えている。黒坂命の名は常陸国風土記逸文の信太部の条にも見え、それによると、陸奥の蝦夷を討って凱旋の途中、多賀郡角折山（立割れ一豎割山ともいい高萩と十王町の西にある）に病死したことを記しているが、この記事にある大臣の族については（21）、風土記の同条の注に「オオノオミハ意富臣カ」とあるように、意富は多、大、飫富とも通じ、また同一に用いられたようである。市内飯富町の飯富も飫富の変化したものである。大和には多臣の住地であった十市郡飫富郷があり、上総国望陀（もうだ）郡にも飫富郷の名が見え、郷内の延喜式内社飫富神社は、建借間命を祀っているが、飯富町にも建借間神社があつて、建借間命を祭神としているのである。

古代の氏族はその領域内に氏神を奉斎した。それでその地方にどのような氏族が勢力を扶植したかは、その氏族の残した神社を調べることによっても、ある程度の手がかりを得ることができる。

大場磐雄氏は「常陸鏡塚」に建借間命（22）と、鹿島神宮との関係について『鹿島神宮ももとは多臣一族の奉斎した神社であるといわれるし、風土記香島郡の条には、「大化五年（六四九）に下総海上国造部内軽野以南一里と、那賀国造部内寒田以北五里とを割いて、神郡を置いた」と記している。然らば鹿島郡の大部分は、もともとこれ仲国造の配下に属し云々』と述べ、さらに三代実録、貞観八年正月廿日（八六六）の条にある鹿島神宮造営の用材を、遙か二百余里（一里＝六町）離れた那珂郡に求めたことによる苦難の記事を引用して、「後世も那珂郡が鹿島神宮と深い関係にあつた」と記している。

また建借間命の「建」は美称であり、「借間」はカシマすなわち「鹿

島」と相通ずるものとし、じつは鹿島神宮の中臣氏も多臣の一族ではなかったかと説いている。その理由は、三代実録に見える鹿島神宮司の言と、延喜式神名帳に載っている鹿島神社の関東北部・東北地方における所在が、鹿島大神を奉斎した氏族、すなわち多臣族による蝦夷征伐、東北開拓にあったというのである。

そして古事記中巻、神武天皇条に「神八井耳命ハ（前略）道奥（みちのく）石城国造、常道（ひたち）仲国造（中略）等ノ祖」とあることによっても傍証されるとしている。

このように那珂郡を含む常陸地方に強大な豪族があったことが、神社の奉斎ということからも考えられるがかれらを葬った古墳の状態から推測すれば、行方郡潮来町大生孫舞塚古墳・東茨城郡大洗町鏡塚古墳・水戸市愛宕山古墳・内原村牛伏・黒磯古墳群があげられるのである。

行方郡大生の孫舞塚古墳は全長八〇メートル余の前方後円墳で、付近には鹿島神宮の元宮大生神社があり、これも鹿島神宮との関連から多臣族の一族の墓であろうと推定されるし、また鏡塚についても、同様の推定を下すことができる。

水戸市文京一丁目にある愛宕山古墳は、六世紀のこの地方最大の墳墓であったばかりでなく、常陸地方における有数の墳墓でもある。このような墳墓は、おそらく強大な勢力によってはじめて作り得るところであろう。建借間命の墓にふさわしいものに違いない。また内原町牛伏・黒磯の古墳群は、一般の古墳群が一つの前方後円墳を中心に数基の円墳を配して構成されているのに対して、わずか三百メートル平方の範囲に七基の前方後円墳をもち、円墳はわずかに三基にすぎないという特異な古墳群である。同村田島（水戸市に近接）にも十数基の円墳と三基の前方後円墳を含む古墳群があり、この地を含めても二キロ

に満たない地域が、古墳によって占められていることは、一応注目すべきであろう。牛伏・黒磯の古墳群の前方後円墳の中には、舟塚や「かろうど塚」古墳のように、六世紀前半に造られたものもあるが、その他の五基の前方後円墳は、六世紀中葉以降、八世紀前半までに営まれた古墳であるように思われる。

してみれば、この牛伏・黒磯古墳群の性格は、他の古墳群と比べたとき、より深く那珂国造家と結び付きそうである。この古墳群に近く有賀神社があり、この神社は古くから大洗神社と関連がある。また大洗神社は、もとは鏡塚古墳をのぞむ宮田郷内に存在したばかりでなく、鹿島神宮の神官によって奉祀されていたともいわれる。さらに尊卑分脈、藤原武智麿系図の中に、武智麿の子弓主の子に従五下宮田、母は鹿島郡人也とあって、この弓主の子宮田の名が、母の生地鹿島郡宮田郷の宮田を名とすることがみえる。これらの事実から鹿島神宮・大洗神社・有賀神社の関係が考えられる。

以上の説明によっても、建借間命を中心とする多臣族が、鹿島郡から行方郡を経て那珂川河口に到達し、五世紀後半から六世紀前半には、すでに渡里町を中心とする水戸地方に進出したことが推定できる。

六世紀中葉にはさらに那珂川の縁辺から内原町牛伏にいくらか寄った付近に中心をおき、那珂国を経営したと考えられそうである。内原町大字牛伏、黒磯にある古墳群は、このような見地に立てば、愛宕山古墳を建借間命の墓として、それ以後の那珂国造家累代の墓地ということになるだろう。

建借間命の後の那珂国造家については、常陸国風土記行方郡の条に、茨城国造小乙下壬生連麻呂、那賀国造大建壬生直夫子等が、中臣幡織田大夫等に願ひ出て、行方郡を作った記事が見えている。風土記によれば、孝徳天皇癸丑の年（白雉四年一六五三年）にあたり、この時の国

造が壬生直夫子であることを伝えている。しかし、それ以後、那賀国造壬生氏の名は夫子をもって絶え、宇治部氏に移っているのである。建借間命の後が壬生氏であることは間違いないとして、壬生氏と宇治部氏とは果たして同族であるかどうかは容易には決定しがたい。この事については、次章第一節で述べよう。

井上光貞氏(23)によれば、常陸国が大和朝廷の支配下に入った時期は、七世紀の初頭であろうというが、斎藤忠氏(24)は国造本紀にある国造の任命の時期をもとに、古墳の築造と比べて、これを否定している。以上述べたように、常陸国が大和朝廷の影響を受けた時期は少なくとも五世紀後半ないし六世紀の前半であり、那珂川流域地方も、六世紀中頃には、完全に大和朝廷の支配下に入ったことが考えられる。宇治部氏による那珂郡司の活躍の行なわれた七世紀後半から、八世紀の中葉にかけては、徳輪寺(25)に建立されてもまだ古墳の築造が行なわれていた。この現象について尾崎喜佐雄氏(26)は、「古墳への厚葬は父母の甦生を期待しての処置であり、神社は支那の家廟の影響によって作られ、従来儒教の教える中心が孝であったから、いずれも現世的な観念に立脚していることがわかる。結局仏教の死穢の軽視と靈魂のみの済度は、現世的な事実によって古墳の築造から寺院の建立に置きかえられたが、その根底を流れる思想は祖先崇拜にあった。しかもその死穢感の強調によって、やがて火葬が流行しはじめるのであるが、これによって古墳の築造も跡を絶ったのである。その時期は火葬墓に用いられた蔵骨器が正倉院御物の薬壺に類似しており、八世紀前半に使用されているから、この時期に古墳と火葬墓との交替の時期がある。」と述べている。那珂川流域についてもほぼ同様に考えてよいであろう。

注 (1) 大森信英氏 昭和三十六年 発掘

(2) 文部省史蹟調査報告2「吉田古墳」その他、柴田常恵・梅原末治両氏



の報告がある。

- (3) 大森信英氏「茨城県那珂郡静村大字静、新宿古墳調査報告」茨城高校史学部紀要 第一輯 昭和二十六年
- (4) 大森信英氏「渡里西原六号墳」茨城高校史学部紀要 第一輯 昭和二十六年
- (5) 大森信英氏実査
- (6) 大場磐雄氏調査「茨城県行方郡大生原古墳」日本考古学年報 5、日本考古学協会編
- (7) 昭和三十八年 大森信英氏・茂木雅博氏実査、箱式石棺が前方部と後円部のくびれ部に露出している。
- (8) 大森信英氏 県立麻生高校歴史クラブ調査「茨城県行方郡麻生町南古墳」日本考古年報十一 日本考古学協会編
- (9) 茨城県教育委員会編 齊藤忠氏「那珂郡平磯町三ツ塚古墳群調査報告」那珂湊市教育委員会 大森信英氏「那珂湊市平磯町三ツ塚古墳群調査報告Ⅱ」
- (10) 昭和三十八年八月 大森信英氏 県立太田一高史学部発掘調査
- (11) 大森信英氏「渡里村大字堀字西原四号地下式墳」茨城高校史学部紀要 第一輯
- (12) 大森信英氏実査 発掘
- (13) 水戸市谷田町 後藤清一氏蔵
- (14) 西宮一男氏「古墳総覧」筑波郡谷田部町教育委員会編
- (15) 大森信英氏実査 榑 陽氏「吉田住居址の発見史窓Ⅰ」昭和二十三年（現在なし）  
同 氏「私の発見した吉田遺跡」同右  
この他佐藤次男氏がいはらき新聞に報じたが、榑氏と佐藤氏の発見した住居址は道路の端に露出したものである。

- (16) 伊東重敏氏「大森信英氏等発掘調査」昭和二十六年
- (17) 佐藤次男氏「常陸大串出土の墨書土器」那珂湊考古学一の七 昭和二十七年九月
- (18) 大森信英氏・西宮一男氏「水戸市東町の土師竪穴址」古代学研究 9 昭和二十九年（現在なし）
- (19) 大森信英氏「茨城県東茨城郡山根村の窯址群について」上代文化 第二〇輯  
大川清氏・大森信英氏「水戸市木葉下町三ヶ野第二号窯址発掘結果報告書」
- (20) 大場磐雄氏前掲論文 注 2
- (21) 武田祐吉氏編「風土記」岩波文庫本による。
- (22) 大場磐雄氏前掲論文 注 2
- (23) 井上光貞氏「国造制の成立」史学雑誌第六十巻の第五十一号
- (24) 斉藤忠氏「国造に関する考古学上よりの一試論」古墳とその時代(二)  
古代史談話会編
- (25) 高井悌三郎氏報
- (26) 群馬県多野郡吉井町教育委員会編 尾崎喜左雄氏「入野遺跡」昭和三十七年